

伊丹市

南 本 町 遺 跡

—災害復興県営伊丹南町住宅建築事業に伴う発掘調査報告書—

平成10年3月

兵庫県教育委員会

伊丹市

南 本 町 遺 跡

—災害復興県営伊丹南町住宅建築事業に伴う発掘調査報告書—

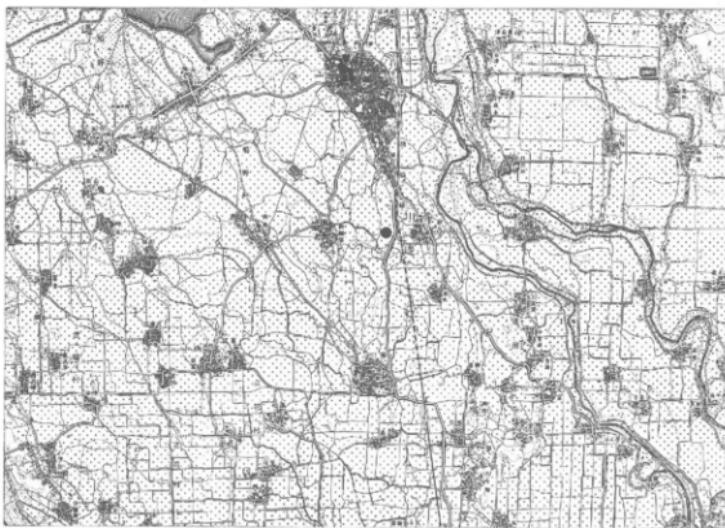
例　　言

1. 本書は、伊丹市南町3丁目28-1に所在する南本町遺跡および新たに発見された古墳3基の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、阪神・淡路大震災の災害復興住宅である災害復興県営伊丹南町住宅建築事業に関連するもので、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部の依頼を受けて、平成7・8・9年度に兵庫県教育委員会が実施した。
3. 調査のうち平成7年度・9年度の確認調査は文化庁国庫補助金によるもので、現地作業については株式会社安西工業の協力を得た。平成8年度の全面調査は阪神・淡路大震災復興事業の一環として、都市住宅部の費用負担で実施した。現地作業については、株式会社新井組の協力を得た。
4. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は、調査員が行った。
5. 出土品整理作業は、平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
6. 遺物の写真撮影は、株式会社新井組が実施した。
7. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は鐵　英記が行った。
8. 本報告にかかる遺物・写真・図面は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
9. 現地調査および整理作業の際には、関係各機関を始め、以下の方々からご協力やご教示をいただいた。ご芳名を記して深謝の意を表す。

小長谷正治・松田正昭・村上泰樹・小潤忠司・丸山俊一郎・福島孝行

凡　　例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とし、方位は座標北を指す。座標値は第V系の国土座標を用いている。
 2. 遺物には基本的に通し番号を付けている。ただし、埴輪、石器・石製品には、その頭にそれぞれHとSをつけて、土器・瓦と区別している。また、遺物の番号は本文・挿図・図版とも統一している。
 3. 本書における地区名は現地での呼称を使用した。遺構名は種別と数字で表記している。数字は遺跡全体で1からふっており、呼称が変化したものもある。以下に、新旧遺構名の対照を行う。
- | | |
|--------|--|
| 1 トレンチ | SD01→溝1／SD02→溝2／SD03→溝3／SD04→溝4／SD05・06→溝5
SD04南側落込み→落込み1 |
| 2 トレンチ | 無→掘立柱建物1／無→掘立柱建物2／土坑→土坑1／SD01→溝6 |
| F トレンチ | SK05→柱穴1 |
| E トレンチ | 掘立柱建物1→掘立柱建物3／溝1→溝7／溝2→溝8／溝3→溝9 |
| 3 トレンチ | 無→溝10／古墳周溝→埋没古墳1／無→掘立柱建物4／SK01→土坑2 |
| 4 トレンチ | 無→溝11 |
| C トレンチ | SX01→溝12（埋没古墳2）／無→柱穴2 |
| D トレンチ | SB03→掘立柱建物5／無→柱穴3／SD04→溝15／SD05→溝16 |
| G トレンチ | SD02→溝13（埋没古墳3）／SD01→溝14 |



遺跡の位置 上：明治42年測図「伊丹町」1/50,000 陸軍測量局陸地測量部発行（明治44年）
下：平成3年修正測量「伊丹」1/50,000 国土地理院発行（平成3年）

目 次

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯と経過（種定淳介）	1
第2節 各年度の調査（鐵 英記）	2
第3節 整理作業の経過（鐵）	3

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（鐵）	4
第2節 歴史的環境（鐵）	5

第3章 調査の結果

第1節 遺構

1. 基本層序（藤井 整）	9
2. 第1トレンチ（藤井）	10
3. 第2トレンチ・Fトレンチ（藤井）	13
4. Eトレンチ（平田博幸）	16
5. 第3トレンチ（藤井）	19
6. 第4トレンチ（藤井）	23
7. Cトレンチ・Dトレンチ（藤井）	24
8. Gトレンチ（藤井）	26

第2節 遺物

1. 土器・土製品（鐵）	27
2. 増輪（柏原正民）	32
3. 石器・石製品（鐵）	36

第4章 まとめ

第1節 遺物

1. 土器（鐵）	37
2. 増輪（柏原）	38
第2節 遺構（藤井）	39

参考文献	41
報告書抄録	42

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表

挿図目次

遺跡位置図

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 第1図 周辺遺跡分布図 | 第8図 周溝土層断面図 |
| 第2図 土層柱状図 | 第9図 土坑2平面・断面図 |
| 第3図 調査区配置図 | 第10図 第3トレンチ拡張区平面図 |
| 第4図 第1・第2・Fトレンチ平面図 | 第11図 漆土層断面図・出土青磁碗実測図 |
| 第5図 掘立柱建物1平面図 | 第12図 C・Dトレンチ平面図 |
| 第6図 Eトレンチ平面図 | 第13図 掘立柱建物5平面図 |
| 第7図 第3・第4トレンチ平面図 | 第14図 Gトレンチ平面図 |

図版目次

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 図版1 出土遺物(1) | 1トレンチ溝4／溝5 |
| 図版2 出土遺物(2) | 1トレンチ溝5 |
| 図版3 出土遺物(3) | 1トレンチ溝5／包含層／2トレンチ包含層 |
| 図版4 出土遺物(4) | 2トレンチ包含層／3トレンチ埋没古墳1周溝／漆 |
| 図版5 出土遺物(5) | 3トレンチ土坑2／包含層 |
| 図版6 出土遺物(6) | 4トレンチ／第1次調査／第4次調査 |
| 図版7 出土遺物(7) | 3トレンチ埋没古墳1周溝埴輪 |
| 図版8 出土遺物(8) | 3トレンチ埋没古墳1周溝埴輪 |
| 図版9 出土遺物(9) | 3トレンチ埋没古墳1周溝埴輪 |

写真図版目次

- | | |
|--------------------|------------------|
| 写真図版1 1995年度の調査(1) | 写真図版8 出土遺物(2) |
| 写真図版2 1995年度の調査(2) | 写真図版9 出土遺物(3) |
| 写真図版3 1996年度の調査 | 写真図版10 出土遺物(4) |
| 写真図版4 1995年度の調査(3) | 写真図版11 出土遺物(5) |
| 写真図版5 1997年度の調査(1) | 写真図版12 出土遺物(6)埴輪 |
| 写真図版6 1997年度の調査(2) | 写真図版13 出土遺物(7)埴輪 |
| 写真図版7 出土遺物(1) | 写真図版14 出土遺物(8)埴輪 |

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯と経過

私達は、あの日、あの時間、阪神・淡路大震災という、わずか数十秒の筆舌に尽くしがたい自然の猛威に弄ばれた。兵庫県下の被害は甚大で、多くの人々が何ものにも代えることのできない尊い生命と、そしてさらに多くの方々が生活の基盤財産である住宅を失った。

兵庫県では震災後の復興計画の根幹の一つとして、都市住宅部による「ひょうご住宅復興3カ年計画」を策定し、平成9年度までに12.5万戸の住宅を建築・整備することを決定した。住宅復興事業の中でも、被災者の生活再建の柱となるのは災害復興公営住宅の建設であった。この災害復興公営住宅は、激甚法の指定により建設費の補助率が高いため、被災者の家賃負担は軽減されることになる。このため、災害復興公営住宅の建設は建設戸数3万8600戸と計画され、うち新規建設は2万5100戸、また兵庫県担当の県営住宅は9700戸とされ、早期かつ大量の住宅供給を担っていった。

災害復興県営伊丹南町住宅建築は、こうした事業の一環である。都市住宅部では、交通の至便な伊丹市南部の民間工場用地を15,217m²にわたり買収し、東西型11階建て208戸と南北型7階建て41戸の2棟の復興住宅建設を計画した。

さて、兵庫県教育委員会では、埋蔵文化財が復旧・復興の阻害要因となる危惧を抱えながらも、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合を図るという基本方針の下に事業者との協議を行い、事業部局に対して平成7年2月28日付けで照会文書を送付した。また、文化庁は法的緩和措置を講じ、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本的方針について」(平成7年3月29日付厚生省令第144号、文化庁次長通知)を定めた。これは先の方針を徹底し、既存データの活用による調査の効率化を図ることや、工事の掘削が遺構を損壊する場合のみに発掘調査を実施することなどを含んだ彈力的な対応措置であった。

教育委員会の照会に対して、平成7年3月10日、都市住宅部住宅建設課より災害復興県営住宅16事業についての回答を受理した。県営伊丹南町住宅は、その中の1事業であった。埋蔵文化財調査事務所と住宅建設課による個別協議の結果、事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないものの、「南本町遺跡」や「北畠遺跡」が隣接していること、また文化庁の基本方針として提示された、周辺地域での過去の発掘調査成果などの既存データがないこと、そして工事着手後に遺跡を不時発見した場合の両者の不利益を考慮し、埋蔵文化財の有無とその範囲を確認する発掘調査を用地取得後速やかに実施することで合意にいたった。

平成7年8月11日、住宅建設課から依頼文書が提出され、文化庁から交付された国庫補助金で対応したのが、第1次調査である。この調査の結果、事業予定地の西半部に遺構・遺物を検出した。新たに発見された遺跡の範囲のうち、工事による影響が憂慮されるのは、東西型住居棟と集会所、設備棟である。通常であればいずれも恒久的構造物であり、敷地全域の発掘調査が必要とされる事例であるが、先の文化庁基本方針に従い、掘削が及ぶ基礎工事箇所の調査にとどめた。これが第2次調査であり、そして建設工事は、部分的に平成7年12月から着手された。

ところが、平成8年5月、基礎工事以外の範囲においても掘削が行われることが判明し、遺跡の一部が既に損壊していることも明らかとなつた。このため、復興住宅建設を第一義と位置づけつつ、調査体

制を急速整備し、住宅建設課の費用負担による発掘調査を実施したのが第3次調査である。

建設工事も終了に近づいた平成9年3月、住宅周辺に設置される地下埋設管の工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議し、第4次調査として文化庁国庫補助金で確認調査を行った。

こうして発掘調査による災害復興県営住宅建築の大幅な遅延もなく、工事は平成9年7月に竣工、9月より罹災証明取得者を優先して住民の入居が開始された。

第2節 各年度の調査

南本町遺跡では平成7年度から平成9年度にかけて、計4次にわたって発掘調査を実施した。以下に、各年度の調査概要を示す。

平成7年度

第1次調査（平成7年10月18日～10月19日） 遺跡調査番号 950246

調査担当 柏原正民

事業予定内に 2×2 mの試掘坑を14ヶ所設定し、機械によって掘削した。断面観察と遺物の有無によって、埋蔵文化財の存在の有無を確認した。その結果、事業予定地内の西半部を中心に、古墳時代および奈良・平安時代の遺物と遺構が確認された。

第2次調査（平成7年12月13日～平成8年3月22日） 遺跡調査番号 950341

調査担当 松田正昭（和歌山県から派遣）・藤井 整（京都府から派遣）

第1次調査の結果を受けて、遺構・遺物が分布する範囲のうち、住宅の基礎工事部分を中心に5本のトレチを設置し、確認調査を実施した。調査面積は約1,300m²で、削平された古墳、奈良時代の掘立柱建物・溝、戦国時代末と思われる塗等を検出した。

平成8年度

第3次調査（平成8年6月5日～6月21日） 遺跡調査番号 960108

調査担当 村上泰樹・平田博幸・鐵 英記

第2次調査で確認された埋没古墳および戦国時代末の塗が、建設工法上の都合により削平されることになった。そのため、緊急に640m²の全面調査を実施した。上記の遺構の他に、奈良時代の掘立柱建物が検出され、遺物では土器・埴輪・磁器が出土した。

平成9年度

第4次調査（平成9年4月25日～5月23日） 遺跡調査番号 970133

調査担当 上垣幸徳（滋賀県から派遣）・丸杉俊一郎（静岡県から派遣）・藤井 整（京都府から派遣）

平田博幸・福島孝行（京都府から派遣）

住宅建設部分以外に地下埋設管が設置されることになった。当初、今回の事業予定地は遺構が比較的稀薄と考えられていたため、試掘坑を設定した。その結果、遺構面の広がりが確認されたため、埋設管設置範囲を中心として幅1.5～2mのトレチを設定し、確認調査を実施した。その結果、ピット・土坑・削平された古墳等を検出した。

第3節 整理作業の経過

遺物の整理は一部現場で行ったが、本格的な整理作業は平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

平成8年度

遺物の一部の洗浄・ネーミングを現場で行った。また、金属器の保存処理を実施した。

平成9年度

残った遺物の洗浄・ネーミングは魚住分館で行った。ネーミングは各遺跡調査番号の後に通し番号を付した。接合補強・実測・土器復元・写真撮影・レイアウトを、嘱託員の協力の得て、荒田庁舎で実施した。原稿執筆をまって、本報告書の編集作業を実施した。

これらの作業に関わったものは以下の通りである。

整理担当職員	非常勤嘱託員
技術職員 鐘 英記	主任技術員 中筋貴美子 宮田麻子 古谷章子
技術職員 藤井 整	企画技術員 本庭田英子
技術職員 柏原正民	図下技術員 石野照代 中田明美 中西睦子 横山キクエ
主任 菊池淳子	宮澤昭世
金属器処理	日々雇用職員 綾小路公子 馬縫 薫
主査 加古知恵子	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

南本町遺跡は兵庫県伊丹市南町3丁目を中心位置する。伊丹市は兵庫県の東南部にあり、川西市・宝塚市・西宮市・尼崎市の県内各市と隣接し、東は大阪府池田市・豊中市と接している。

伊丹市は猪名川と武庫川にはさまれた武庫平野に位置する。武庫平野は大きく見れば大阪平野の一部に当たり、猪名川と武庫川の堆積物で形成された平野である。西は六甲山塊、北は長尾山山塊、東は千里丘陵、南は大阪湾に囲まれたほぼ長方形の平野である。地形的には台地と低地に分けることができ、台地は上ヶ原段丘・伊丹台地・農中台地、低地は猪名川と武庫川両河川の氾濫原および南部の三角州に細分できる。

上ヶ原段丘は標高50~100mで、武庫川右岸、六甲山塊の南東麓に分布する。上ヶ原段丘は12~13万年前に、六甲山塊から流下する仁川の扇状地として形成され、その後隆起した段丘である。なお、この段丘が形成される直前の時期には、伊丹地域は内湾で、仁川が大きな扇状地を作っていたと思われる。

遺跡の立地する伊丹台地は、武庫平野の中央に位置し、その大部分を占める。東と西はそれぞれ比高10~20mの段丘崖によって猪名川と武庫川の氾濫原に望み、その北端の加茂神社付近では標高40mを越すが、南に向かって低くなり阪急神戸線付近（標高4~5m）で沖積面下に没する。伊丹台地は複数の段丘面から構成され、東側の伊丹段丘が一番高く、伊丹面と呼ばれており、西側の安倉面や中野面は一段低くなる。従来、伊丹台地は全体として低位段丘として位置づけられてきたが、伊丹面は中位段丘に、安倉面・中野面は低位段丘に対比されることが判明した。伊丹面は12~13万年前の海進によってできた三角州の面が隆起して段丘面になったと考えられる。古生代の流紋岩の礫からなる伊丹礫層とその下に広く分布する海成粘土層の伊丹粘土層で構成されている。安倉面を構成する台地には花崗岩の礫が多く、これは武庫川が六甲山から運んできたものである。また、中野面は伊丹面・安倉面以外の台地にあたり、標高4~5mで沖積面下に没する。南本町遺跡はこの中野面の標高11m付近に立地する。安倉面・中野面の形成年代は、いずれも数万年前と思われるが、詳細は不明である。これらの段丘面が複合した台地上には南流した河川の痕跡が認められ、旧武庫川・旧猪名川などの流路の変遷を示している。

武庫平野の南部は、武庫川・猪名川・神崎川の三角州地帯で、主として縄文海進以後に形成された部分であるが、全てが自然による形成ではなく、中世以降現在に至る人為的な干拓・埋め立てによるものが多く、もっとも変化の激しい地域である。

縄文海進による最大海進時の汀線は、阪急神戸線に沿った標高4mにあたり、それ以南は猪名川・武庫川の本支流の運ぶ土砂の堆積と海退の結果形成されたといえる。大阪湾内では、沿岸潮流が西方の諸河川の流出した砂礫を絶えず東方に運搬し、その一部は海底に堆積して沿岸砂州を形成した。こうした沿岸の砂州も、海退期になると陸地に近いものから順次姿を現し、陸地化して砂帯となり海岸線が前進する。武庫平野南部の猪名川と武庫川の間には、砂帯列が3列確認でき、北から長洲・難波・大鳥付近の第1列、杭瀬・大物・尼崎付近の第2列、松島・初島・向島の第3列となる。第1列の砂帯は中世以前に、第2列の砂帯は中世に陸地化したと思われ、第3列の砂帯は近世に埋め立てられたといえる。縄文時代の海岸線を前記のように仮定すると、標高2mが弥生時代、標高1mが奈良時代以降のものといえる。

第2節 歴史的環境

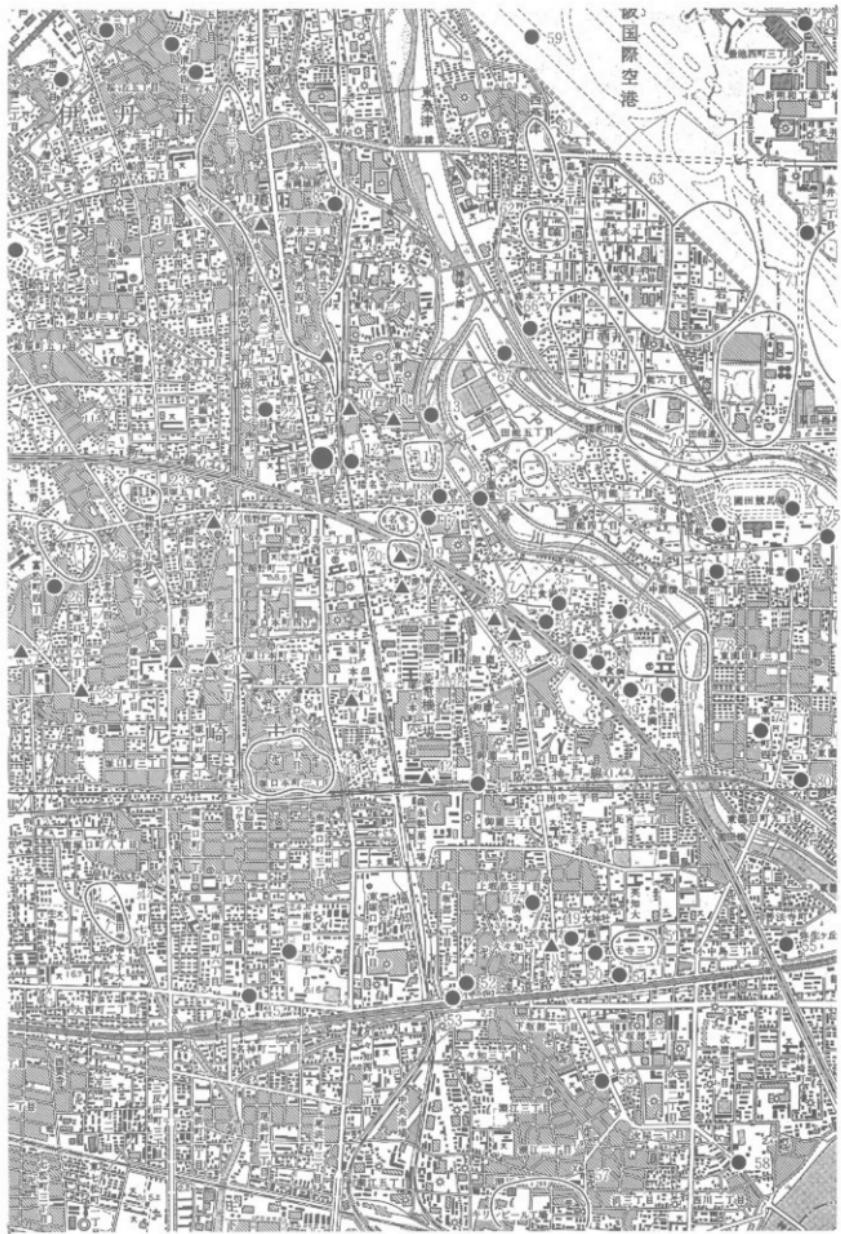
猪名川流域の沖積地上や洪積台地上には旧石器時代以来、人々の生活の痕跡が認められる。ここでは南本町遺跡周辺の歴史的環境について概観したい。

西摂地方で認められる旧石器時代の遺跡は発掘調査ではなく表面採集資料によって存在が予想されているものが多い。伊丹台地では現在のところこの時期の遺跡は未発見であるが、豊中台地の豊中市萱ヶ池北遺跡・柴原遺跡・猪名川上流域の川西市加茂遺跡では国府型ナイフ形石器が見つかっており、豊中市野畠遺跡・川西市花屋敷遺跡では有舌尖頭器の出土が報告されている。

縄文時代の遺跡の立地は、当初旧石器時代と同様に丘陵や台地の縁辺を中心としていた。しかし、猪名川の沖積地の形成に伴い、時期が下るにつれて、沖積地にも居住域を拡大してくる。この時期の遺跡には内容の明らかなものが少なく、遺物が単独で確認されているだけの場合も多い。遺跡の内容がある程度明らかなものとしては、千里丘陵にある野畠春日遺跡で中期の墓域、野畠遺跡で居住域が確認されている。伊丹郷町下層（6）では船元Ⅱ・Ⅲ式に新崎式が伴って出土した他、後期の土器も認められる。大阪空港A遺跡では勝坂式が出土し、森本遺跡（63）、原田西遺跡（72）、植積遺跡でも中期の土器が出土している。後期では加茂遺跡で土器植基が確認されている他、大阪空港B遺跡（59）が古くから知られている。晚期では口酒井遺跡（71）でこの時期の土器が集中して出土しており、田能遺跡（70）でも下層から突審文土器の出土が認められる。

弥生時代になると前代に引き続いて形成の進む、猪名川と藻川の氾濫原である沖積地の微高地を中心として遺跡数が増加する。猪名川中流域には前期初頭から田能遺跡・勝部遺跡（71）という二つの拠点集落が出現する。猪名川川床遺跡（67）でも前期からの包含層が確認されており、前述の口酒井遺跡でも突審文土器と前期の土器の共存が認められる。また、やや丘陵よりの豊中市山ノ上遺跡でも前期の溝から突審文土器の出土が認められる。中期になると居住域が拡大し、山麓や台地上にも遺跡の立地が認められる。田能遺跡では居住域と墓域が確認されており、墓には銅鏡や玉類と言った副葬品をもつものが認められる。豊中市新免遺跡は中期から後期にかけての大規模集落で堅穴住居・方形周溝墓が多数検出されている。口酒井遺跡でも中期から後期にかけての住居域と墓域が見つかっており、原田西遺跡でも中期の方形周溝墓群が確認されている。後期になると田能遺跡は継続するが、勝部遺跡は廃絶し、前述の遺跡に加え、四ノ坪遺跡（76）、中ノ田遺跡（19）、若王子遺跡（51）、利倉西遺跡、東園田遺跡等の集落が出現する。青銅器関係では田能遺跡で銅劍鋒型・山ノ上遺跡の後期住居から小型彷製鏡、銅鏡が勝部遺跡・田能遺跡で確認され、中村遺跡からは外緣付紐式銅鐸が、利倉遺跡からも飾耳部破片が出土している。

猪名川中流域と伊丹台地では前期前半の古墳は見つかっていない。しかし、猪名川東岸には前期末から造営が始まった豊中市桜塚古墳群・西岸には三角縁神獣鏡が出土した前期後半の水草古墳の他、中期に造営の始まる猪名野古墳群が現れる。桜塚古墳群は明治時代の絵図によると36基存在したとされているが、現存するのは前期末の前方後円墳である大石塚古墳・小石塚古墳と中期の前方後円墳である御獅子塚古墳・円墳の大塚古墳・南天平塚古墳の5基である。大石塚古墳・小石塚古墳は内部主体は不明であるが、墳丘に盃形埴輪・円筒埴輪を配し、周囲では円筒埴輪が検出されている。大塚古墳では墳頂の主体部で3基の棺が検出され、方格規矩神獸鏡・甲冑・武具・農耕具が確認された。御獅子塚古墳で



第1図 周辺遭跡分布図

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
a	南本町遺跡	古墳、古代、中世	41	岡院の石棺	古墳
1	大鹿お塚	中世	42	御園古墳	古墳
2	桜ヶ丘遺跡	縄文	43	坂口城跡	中世
3	千僧遺跡	中世	44	栗山庄下川遺跡	弥生、古墳、古代
4	伊丹小学校遺跡	弥生、古墳	45	メ野遺跡	古墳
5	昆陽林田遺跡	古代	46	海老宇遺跡	古墳
6	伊丹郷町	縄文、弥生、中世、近世	47	伊佐具神社遺跡	古墳、古代、中世
7	女郎塚古墳	古墳、中世	48	伊居太古墳	古墳
8	有岡城跡	中世	49	下川田遺跡	弥生、古墳
9	鶴塚古墳	古墳、中世	50	春日遺跡	古墳
10	蜜塚古墳	古墳	51	若王寺遺跡	弥生、古墳
11	黄金塚古墳	古墳	52	川崎遺跡	弥生
12	北畠遺跡	弥生、古墳	53	茶屋ノ前遺跡	弥生、古墳
13	義川河原遺跡	古墳、古代	54	二ノ坪遺跡	弥生、古墳
14	猪名寺庵寺	古代	55	善法寺遺跡	弥生、古墳
15	上園橋遺跡	弥生	56	下板部遺跡	弥生、古墳
16	前畠遺跡	弥生	57	猪名庄遺跡	古墳、古代、中世
17	寺前遺跡	弥生、古墳	58	西川遺跡	古代、中世
18	真淨坊遺跡	弥生、古墳	59	大阪空港B遺跡	縄文、弥生
19	中ノ田遺跡	弥生、古墳、古代	60	麻田藩陣屋跡	近世
20	大塚山古墳	古墳	61	西桑津遺跡	弥生、古墳、古代、中世
21	南清水古墳	古墳	62	森本居館跡	弥生、古墳、中世
22	平松町遺跡	古代	63	森本遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
23	御願塚遺跡	古代	64	岩屋遺跡	古墳、古代
24	御願塚古墳	古墳	65	走井遺跡	弥生、古墳
25	南野遺跡	古墳	66	春日神社境内遺跡	古代
26	平塚古墳	古墳	67	猪名川川床遺跡	古墳、古代
27	車塚古墳	古墳	68	春日神社遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
28	坂塚古墳	古墳	69	口酒井遺跡	縄文、弥生
29	琵琶塚古墳	古墳	70	田能遺跡	縄文、弥生、古墳
30	柏木古墳	古墳	71	勝部遺跡	弥生
31	池田山古墳	古墳	72	原田西遺跡	弥生
32	食満1号墳	古墳	73	田能高田遺跡	弥生、古墳
33	食満2号墳	古墳	74	園田競馬場遺跡	弥生
34	西ノ口遺跡	古墳	75	椎堂遺跡	弥生
35	喜撰町遺跡	弥生	76	四ノ坪遺跡	弥生、古墳、古代
36	鎌田遺跡	古墳	77	大西遺跡	弥生、古墳
37	南ノ口遺跡	中世	78	義川河床遺跡	古墳、古代
38	宮ノ前遺跡	古墳	79	神楽田遺跡	古墳、古代
39	東口遺跡	古墳	80	深田遺跡	古墳
40	古宮遺跡	弥生、古墳			

第1表 周辺遺跡一覧表

は後円部の主体部で2基の棺を検出し、獸文鏡・甲冑・武具・盾・農耕具などが確認された。南天平塚古墳では主体部として割竹形木棺が用いられ、変形六獸鏡・武具が確認された。猪名野古墳群は大塚山古墳(20)・南清水古墳(21)・池田山古墳(31)・御園古墳(42)・御願塚古墳(24)という5基の前方後円墳を初め、柏木古墳(30)や食満1・2号墳(32・33)等で構成され、その他にも多数の小規模古墳も含め、20基以上あったと思われる。しかし、桜塚古墳群と同様、早くから削平を受け全貌は明らかではない。大塚山古墳は既に消滅しているが、粘土櫛と竪穴式遺物埋納土坑を持ち、埋納土坑からは馬具・工具・武具、主体部から五鈴鏡・玉類・鉄刀出土している。南清水古墳は埴輪と須恵器片が見つかっており、池田山古墳は既に消滅しているが、鏡・武器の出土が伝えられている。御園古墳では埴輪片と追葬された石棺が見つかっており、御願塚古墳でも須恵器・埴輪の出土が報告されている。この他にも、女郎塚(7)・鶴塚(9)のように有岡城の砦が上に築かれたものが2例、近年の調査で埴輪を伴う小古墳が数基発見されている。また、利倉南遺跡では中期の小方墳群が発見され、埴輪・須恵器が出土している。当時の海岸線に沿って西撰最大規模の前方後円墳である伊居太古墳(48)がある。円筒埴輪・須恵器が出土している。後期ではその前半に猪名野古墳群で追葬が見られ、大型の横穴式石室を持つ単独墳である池田市鉢塚古墳・川西市勝福寺山古墳が猪名川のやや上流に出現する。後期後半からは伊丹台地・豊中台地・長尾山丘陵に群集墳が展開する。最近では猪名庄遺跡(57)でも埋没古墳が見つかっている。集落遺跡としては箕輪遺跡・山ノ上遺跡・中ノ田遺跡・田能高田遺跡(73)・岩屋遺跡(64)・伊丹郷町下層等が挙げられる。田能高田遺跡では前期から中期にかけての集落跡が見つかり、石鋼片・破鏡も出土している。新免遺跡では焼け歪みのある須恵器や窓体等が出土しており、桜井谷窓跡群に間連した集落であると考えられている。島田遺跡では古墳時代中期から後期にかけての滑石製模造品が多数出土している。

古代の遺跡としては白鳳時代から奈良時代の法隆寺式の伽藍配置を持つ猪名寺庵寺(14)、伊丹市伊丹庵寺がある。猪名寺庵寺に関連するものとして、中ノ田遺跡で奈良時代の掘立柱建物や多量の遺物が検出されていたが、最近では南本町遺跡でも奈良時代に属する大型の掘立柱建物が確認されている。また、猪名庄遺跡では奈良時代の初期莊園関連の遺構の他、平安・鎌倉時代の建物群も見つかっている。伊丹庵寺は平安時代に一度再建され、その際に金堂基壇に3基の瓦窯を営んでいる。口酒井遺跡では平安時代中頃の掘立柱建物の他、条里の痕跡を示すと考えられる溝が検出されている。上津島遺跡では奈良時代の河川より人形・斎弔が発見されており、上津島南遺跡では奈良時代～平安時代末期の掘立柱建物・井戸・墓などが検出されている。

中世城館としては伊丹氏より鎌倉時代末には築造され、天正年間に荒木村重により惣構えの城として改築された有岡城が伊丹郷町の下層で検出されている。これまでの調査で建物跡・堀跡・土壘跡・溝跡等の主郭とそれに付随する砦の様相が判明しつつある。森本遺跡・口酒井遺跡の一部は森本氏の居館跡に当たるものと思われるが、青磁・瓦器・土師器等遺物の出土は認められるものの、具体的な遺構は判っていない。他にも天正年間に一向一揆衆により築かれた塚口城跡(43)や田能城があったとされる春日神社遺跡(68)等がある。

近世では有岡城の範囲とほぼ重なる形で、酒造業で栄えた伊丹郷町の遺構が検出されている。建物跡・溝・かまどなどの生活に関わる遺構の他、庭園・水琴窟や酒蔵等の当時の暮らしぶりを伺わせる遺構も検出されている。

第3章 調査の成果

第1節 遺構

今回の報告は平成7年度に実施された第1～第4トレンチと、8年度の第3トレンチ拡張区、9年度に実施されたC～Fトレンチの3年次にわたる調査（第3図）の報告である。以下では調査年度にかかわらず、近接したトレンチごとに報告を行うこととする。

1. 基本層序（第2図）

今回の調査地は、調査上の制約が多く極めて変則的なトレンチ設定となった。調査地は工場跡地であつたため、遺構面も包含層も著しい削平を受けている。ここでは各トレンチにおける代表的な土層を柱状図として示すこととし、あわせて全体の層序をまとめて説明をおこなう。

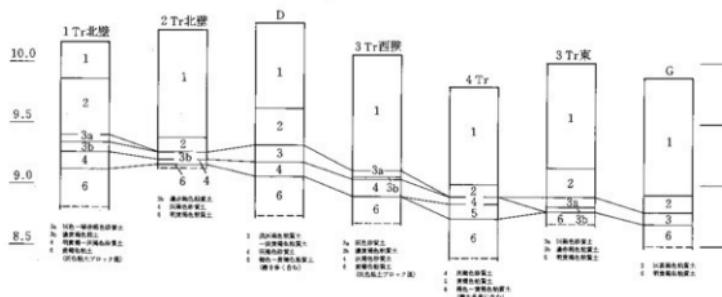
調査区の基本層序は盛土も含めて6層である。このうち第6層は人の手が加えられていない、いわゆる地山層である。この層を中心に微地形を復元した場合、調査区内は北西隅が最も高い。そこから、南と東の方向へ緩やかに傾斜する格好になる。

第1層は現代の盛土である。調査区全体に平均して約80cmの厚さで碎石が敷かれ、整地されている。

第2層は工場とともにような擾乱層である。主に工場廃棄に伴うものとみられる焼土や鉄片が、約10～20cmの厚さで堆積している。一部では工場の基礎が第6層にまで達しており、遺構面を著しく損壊している。工場の年代は定かではないが、1885（明治18）年発行の陸軍地図では、農地となっていることから、第2層はそれ以降の堆積であることがわかる。

第3層はa、bの2層に分けられる。第3a層は灰色～暗赤褐色砂質土で耕作土、第3b層は淡黄褐色粘質土で床土と考えられる。遺物は幕末以降の陶磁器片が出土しているが、量的には多くない。先の陸軍地図にある農地が、これにあたると考えられる。

第4層は灰褐色砂質土である。この層自体が、削平によって失われているトレンチも存在する。第4層が残っているトレンチにおいては、古墳、奈良、戦国各時代の遺構がこの層の上面で検出できた。特に奈良時代の遺構は同系色のため、検出が困難であった。



第2図 土層柱状図

第5層は黄褐色粘質土で、若干細砂を含む。第4層以上の層によって削平されており、調査区南半の一部でしか検出することができなかった。

第6層は明黄褐色～灰褐色粘質土である。土層はきわめて硬質である。ところによっては拳大の礫を多量に含み、遺構の開削の妨げとなっている。この礫はいわゆる伊丹礫層が褶曲して第6層に影響を与えたものである。このような礫混じりの層は、それぞれが局所的ではあるが、今回の調査区全域において認められた。

2. 第1トレンチ（第4図）

今回の調査区では最も北に位置する東西22m、南北17mのトレンチである。ここでは奈良時代の遺構のみを検出した。遺構は溝5条とピット3基、遺物を含む浅い落込みである。これらはすべて第4層上面において検出した。

遺構はいずれもトレンチの北半に集中しており、南半には全く存在しなかった。包含層中における遺物の出土状況も、同様に南半では稀薄であった。このような遺構分布の偏りは、第6層中に多量に含まれる礫が原因であると考えられる。この第1トレンチでは中程を境に、南半に向かうほど多量の礫を含んでおり、遺構の開削を困難にしている。

奈良時代の遺構

溝5

溝5は東方向と北方向へし字に屈曲する溝である。トレンチの北半において西南のコーナー部分を確認した。溝の規模は東西方向の幅が1.2m、南北方向の幅が2.7mと二倍以上の差がある。トレンチの東端ではやや不整形に屈曲し、幅も2.2mとやや広くなる。

溝の断面形は緩やかなU字形で、検出面からの深さは東西、南北ともに25～30cmである。埋土は灰褐色～暗灰褐色粘質土で直径1～7cmの礫を多く含んでいた。埋土の検討からは、自然に埋没したものと判断できる。埋土中の礫は第6層中のものであろう。

遺物の出土状況については、いずれかの場所に集中するという状態ではなかった。また、接合の結果、完形になるものはなかった。遺物はいずれも溝の底から数cm浮いた状態で出土しており、溝がまだ機能している段階で土器が廃棄されたものと考えられる。

直角に曲がるという特徴などから、この溝は建物等を区画する性格をもつ可能性が高い。しかしながら、今回の調査では区画内に掘立柱建物等を見いだすことができず、区画の内側を知る手がかりを得ることはできなかった。

溝5関連遺構

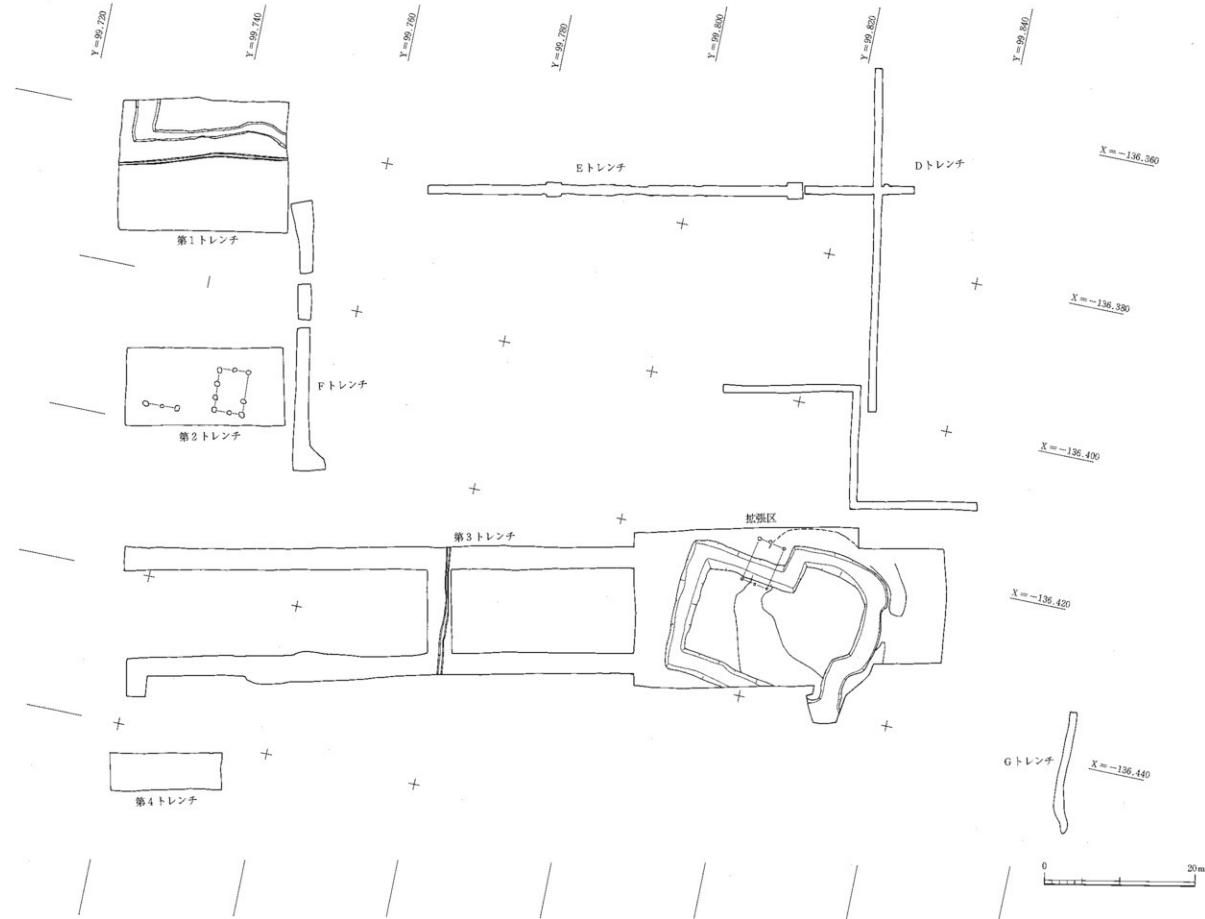
溝5に区画される内側部分ではピット3基と溝3条を検出した。

溝1は幅0.4～0.5m、検出面からの深さ15cmの南北方向の溝である。

溝2は幅0.3m、検出面からの深さ5cm足らずの南北方向の溝である。

溝3はトレンチの東端で検出したため、幅については0.5m以上ということしかわからない。検出面からの深さは30cmである。

いずれの遺構からも遺物が出土しなかったため、正確な時期は不明である。埋土は暗灰褐色粘質土で、



第3図 調査区配置図

その特徴も溝5のそれと一致する。また、これら3条の溝は全て溝5に合流する形でとぎれており、それより南では検出できなかった。これらの溝の性格は不明であるが、溝5と同時に機能していたものと考えられる。

溝5の内側でピットを3基検出した。いずれも直径0.5~0.6m、深さ12~15cm前後とのもので、柱穴にはならない。遺物は全く出土しなかったが、埋土は暗灰褐色粘質土である。やはり溝5と同時に機能していたものと考えられる。

溝4

溝4は溝5の南側約3.3mの距離に位置し、東西方向にトレンチを横断する。溝の幅は0.5m前後、深さは検出面より10~15cm程度である。遺物は須恵器片・瓦片が出土し、瓦器片が1点含まれている。埋土は灰褐色粘質土であり、その特徴も溝5のそれと一致する。トレンチ東半では奈良時代の遺物を含む落ち込み1を切っている。瓦器片を混入とすると、奈良時代の遺構に時間差が存在するようである。

落ち込み1

落ち込み1は不定形の遺構である。最も広く、深くなるトレンチ東端での幅は2.7m、検出面からの深さは40cmである。西へ行くほど徐々に浅くなり、明確な遺構としてはとらえがたい。埋土は黄灰色粘質土～暗黒褐色粘質土で、奈良時代の遺物を少量含んでいる。同時期の遺構と比べ、この埋土のみが他のものと異なる。おそらく自然地形の窪地に土器が入ったものと考えるのが妥当であろう。

3. 第2トレンチおよびFトレンチ（第4図）

第2トレンチは、第1トレンチの南側に東西21m、南北10mの規模でトレンチを設定した。遺構は飛鳥～奈良時代と考えられる掘立柱建物が2棟、その他に土坑1基と数基のピットを検出した。

Fトレンチは第1トレンチの南東隅から第2トレンチの南東側に接する部分を幅1.5m、長さ35mにわたって調査した。途中2ヶ所については、既設の埋設管のために調査することができなかった。トレンチがとぎれた部分を境に、北から順にF北、F中、F南トレンチと呼称して説明する。

このトレンチでも奈良時代のものと考えられる遺構を検出している。F南では柱穴と考えられるピットや土坑を確認したが、F北とF中では溝以外に遺構は存在しなかった。この状況は第1トレンチ南半の調査成果と合致する。

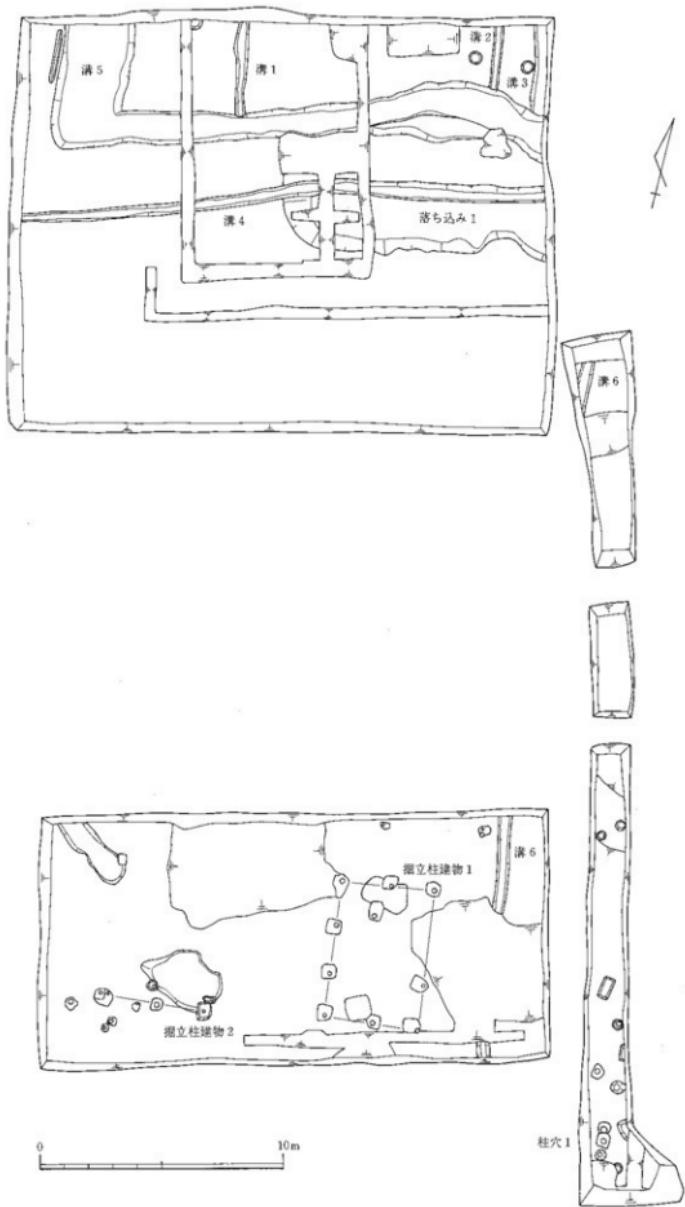
飛鳥～奈良時代の遺構

掘立柱建物1（第5図）

掘立柱建物1は2×4間の建物で、柱掘方のうち東側の1基は近代の擾乱を受けて失われている。建物の棟軸は南北方向で、ほぼ磁北に一致する。南北桁行が4間で5.5m、東西梁行が2間で3.9mである。

柱穴掘方は一辺0.6~0.8m前後の隅丸方形で、検出面より約30cm前後残存していた。掘方埋土には多量の礫が含まれていた。これは、柱穴掘方を掘削した際に伊丹層群中の礫を埋め戻した結果と考えられる。遺物は全く出土しなかった。

柱根の痕跡はすべての掘方内で確認できた。柱径はいずれも20cm前後で、柱穴間の距離は1.8~2.0mである。



第4図 第1・2・Fトレンチ平面図

掘立柱建物 2

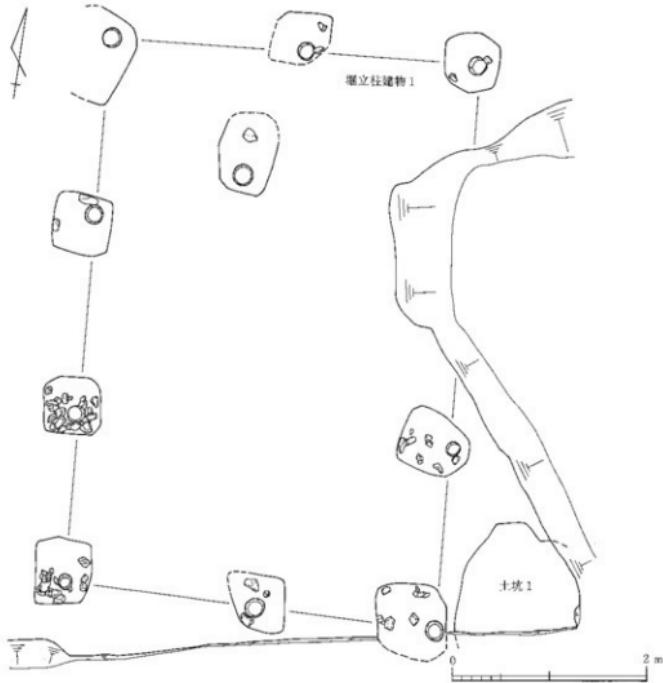
掘立柱建物 2 は、トレンチ西南で柱穴 3 基を検出したものである。建物のうち東西梁行 2 間、3.9m にあたる部分を検出した。建物はトレンチの南側へとのびるようであるが、南半は擾乱を受けて削平されており検出できなかった。建物の棟軸は南北方向であると推定でき、検出した梁軸はほぼ磁石の東西に合致する。

柱穴掘方は一辺 0.6~0.7m の隅丸方形である。掘方は検出面より 30cm 前後残存していた。掘方埋土には礫が含まれてはいたが、掘立柱建物 1 のそれほど顕著ではなかった。柱痕は 3 基とも第 6 層上面で検出した。いずれも 20cm 前後で、柱穴の間隔は 1.9~2.0m である。

この建物は柱列のみの検出であったが、掘立柱建物 1 と軸線が揃うことや、柱痕、掘方の規模、柱痕間隔等がほぼ同規模となることなどから、掘立柱建物と考えてよい。

土坑 1 (第 5 図)

掘立柱建物 1 の南東隅で土坑を 1 基検出した。土坑の東側と南側はすでに近代の擾乱を受けて失われており、正確な規模は不明である。土坑はやや不整形な円形のようで、東西、南北ともに 1.2m 以上の大きさである。検出面からの深さは 8 cm 足らずであるが、奈良時代の須恵器が出土している。



第 5 図 掘立柱建物 1 平面図

溝 6

トレンチ東端で溝を検出した。溝は断面形態がU字形で、幅0.5m、検出面からの深さは15~20cmの規模である。溝の中程は近代の擾乱を受けてすでに失われているが、トレンチを南北に横断して調査区外へとのびることを確認した。溝の主軸はほぼ磁北と一致し、掘立柱建物1の棟軸に沿う。掘立柱建物1との距離は柱穴から2.6mの距離を保って平行している。

この溝6は平成9年度にFトレンチの調査で再び検出することとなった。Fトレンチでは北側をコンクリートブロックによって破壊され、西側も擾乱を受けて失われていた。したがって正確な数値は得られなかつたが、幅20cm以上、検出面からの深さ10cmであった。この結果、溝6はさらに北方向へのびていることが確認できた。

溝6は第2トレンチの東端で検出されたが、さらに東側を調査したFトレンチでも全く遺構が存在しなかつた。のことから、溝6が掘立柱建物1・2等の建物群の東限を区画する性格をもつものとなる可能性がある。溝は断面U字形で雨落ち溝ではなく、人為的な掘削であると考えられる。建物を区画する堀の存在も念頭に置いて精査を行った。しかし、周辺の擾乱と遺構面の削平が著しく、何ら施設らしきものは検出しえなかつた。

柱穴1

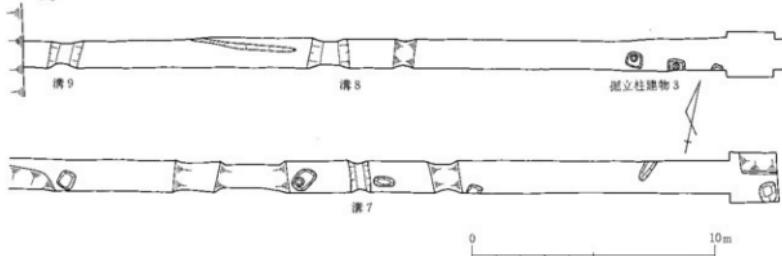
F南では柱穴と考えられるピットを6基と、土坑5基を検出した。F南トレンチのなかでも南端に遺構が集中していた。調査区の制約もあり、柱穴を建物として復元できるものはない。

柱穴掘方と考えられる柱穴1は割丸方形で一辺60cmである。検出面からの深さは17cmであった。柱痕跡は柱穴掘方のはば中央に位置し、直径は20cmである。この柱穴の規模は第2トレンチで検出した掘立柱建物の柱穴と同規模のものである。また、この柱穴も磁北方向に軸をもっているものと考えられる。

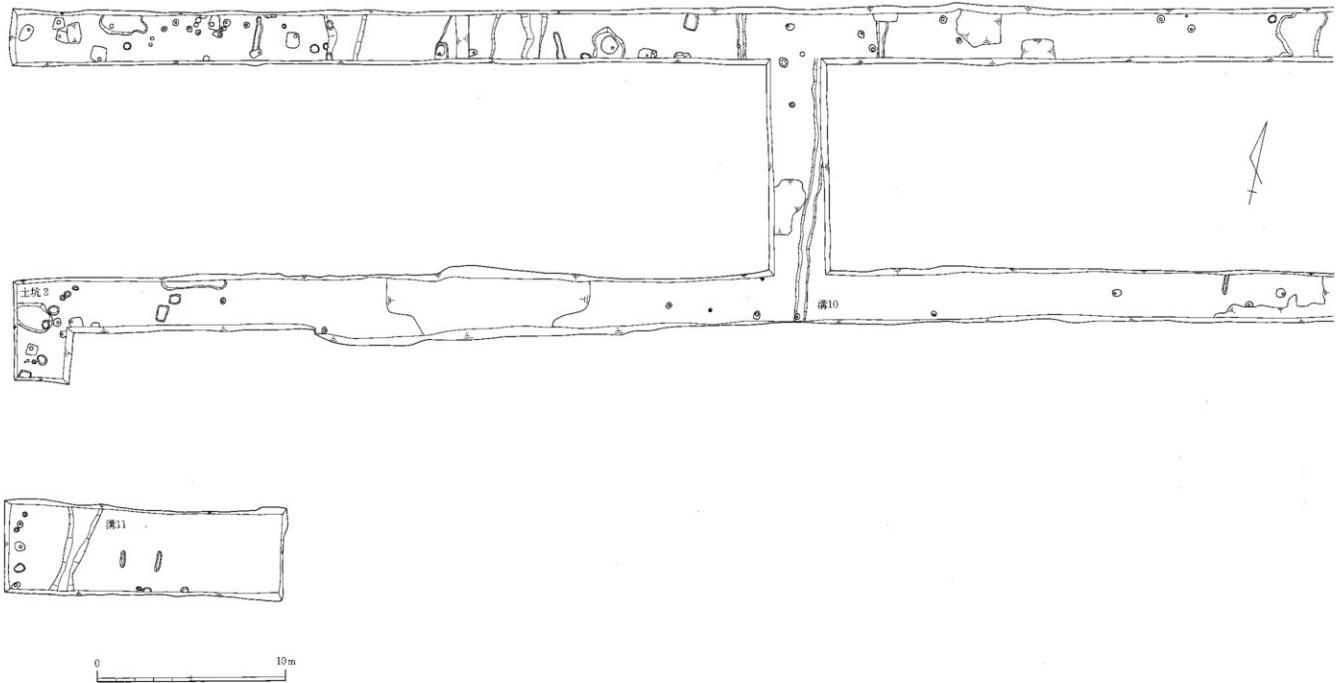
4. Eトレンチ(図6)

このトレンチは、事業地中央部の西辺にある集会所と、東辺に建てられた第3棟とを結ぶ東西方向のトレンチである。幅は約1.2mと狭いが、延長は約63mを測る。

従前の工場の建物等による擾乱が遺構面に及んでいる箇所も一部では見られるが、多くはプライマリーな面を残している。この遺構面は、他の調査区と同様に黄灰色土の上面をそれとするが、厳密にはその上層に約2cm程の厚さで堆積したにぶい灰色土を検出面とする上層の遺構面も認められる。



第6図 Eトレンチ平面図



第7図 第3・第4トレンチ平面図

ただし、上層面と下層面の間層が極わずかであり、層位的な調査は不可能と考え、上記の黄灰色土の上面を遺構面として、2時期の遺構を同一面において検出した。確認した遺構は、溝状遺構・柱穴等少数である。特に柱穴は西側にはまったくなく、中央部から東側に集中する傾向にある。

上層と下層の遺構は、その埋土の違いから容易に識別することができる。上層の遺構は、淡い灰色土を埋土とする幅10~15cm程度の浅い溝状の遺構であるが、数量的には圧倒的に少なく、その中心となるのは茶褐色土を埋土とした下層の遺構群である。この下層の遺構は、他の調査区の結果から勘案して奈良時代に属するものであるため、上層の遺構はおそらく13・14世紀を中心とする中世期のものと考えられる。

奈良時代の遺構

掘立柱建物 3

トレンチのほぼ中央部において、東西方向の2間分の柱列を確認した。トレンチの方向とは若干ずれがあり、ほぼ磁北に直交する方位を示している。梁間2間の南北棟建物址であるが、東桁行の柱列の北側への延長がみられないことから、この3個の柱列を北梁の柱列として調査区外の南側に広がる建物になるものと思われるため、桁行方向の規模はまったく把握することができない。

柱穴は不定形ながら、一辺が40cm前後の隅丸方形を意識しており、その各辺の方向も概ね描えるよう握られている。柱痕心々間は、東側・西側とも約180cmの柱間となっている。よって、東西とも6尺の等間となる。

この建物3の東側にもほぼ同規模の方形掘方を4箇所確認しているが、いずれもその並び（連続性）を確認することができない状況にあるため、建物址の柱穴として捉えるべきかどうか明確ではない。

溝7~溝9

南北方向に走る、溝と考えられる遺構を3箇所確認している。東より溝7・溝8・溝9とする。方向的には3条とも若干の振りをみせるが、狭いトレンチの中での誤差であり、基本的には磁南北の方向をとるものと思われる。埋土はいずれも茶褐色土であり、奈良時代に属するものである。

溝7は、掘立柱建物3の東端柱穴から東へ約17mに設けられている。幅約80cm、深さ約20cmと、3本の中では幅は狭いものの比較的深く掘り込まれている。

溝8は、掘立柱建物3の西端柱穴から西に約12mにある。断面がゆるやかなU字形を呈し、深さは約25cmを測る。幅は南北で若干異なっており、北端で約140cmであるが、南端では約170cmと広くなる。

溝9は、調査区の西端部にあり、溝8とは約9.5mの間隔を置く。幅は約120cmあるが、深さは約15cmの浅い溝になっている。

いずれの溝とも、奈良時代の土器がわずかに出土しているが、細片のため図化するまでには至らなかつた。

5. 第3トレンチ（第7図）

このトレンチでは当初、建物の基礎によって破壊される部分のみが調査対象となっていた。そのため、基礎にあわせて東西方向に幅3m、長さ108mのトレンチを2本設定することとなった。これら2本のトレンチをそれぞれ第3北、第3南トレンチと呼ぶ。途中ピロティにあたる部分について、南北方向に

幅3m、長さ10mのトレンチを設定した。この部分を第3南北トレンチと呼ぶ。

第3北と第3南では比較すると、第3南では遺構の分布がまばらであった。このことは第3南トレンチが全体的に削平されていた部分が多くなったということも影響しているものの、第4トレンチの成果をみても南に下がるほど遺構の密度はさがるということが指摘できよう。

このトレンチでは古墳時代と奈良時代そして戦国時代と考えられる3時期の遺構を確認することができた。古墳時代の遺構は、埋没古墳1基と土坑1基で、後世の、特に戦国時代の濠によって破壊されており、残存状態は良くなかった。奈良時代の遺構はピットと土坑を多数と、溝6条である。これらの遺構は第3トレンチの中でも第3北に集中している。また、さらにその中でも調査区の西端から約40m付近までの範囲内に集中する。遺構の密度が極端にさがる東限に溝10があるため、この溝が奈良時代の遺構を区画する溝になる可能性がある。

戦国時代の遺構は約210m²を囲む濠1基のみである。今回の調査ではほぼその全景を知ることができた。

特に調査区東端では、検出した埋没古墳と戦国時代の濠を調査するため、平成8年度に拡張して調査を行った。この部分を第3トレンチ拡張区と呼ぶ。

古墳時代の遺構

埋没古墳1（第10回）

第3トレンチの東端で埋没古墳を1基検出した。埴丘は後世の削平によって失われており、主体部もすでに消滅している。墳形は円墳と思われ、周溝の内径は15~16m前後である。

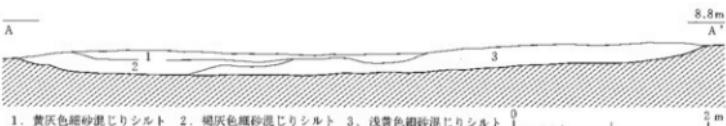
残存する周溝は北東側と、北西侧で幅2.5m、南側では幅5.5mである。南西隅ではやや幅広になる傾向がある。検出面からの深さは最深部でも20cm足らずで、古墳周溝の基底部のみがかろうじて残ったという状況である。

周溝の基底部には高低差があり、南側に向かって低くなっている。絶対高さで比較した場合では、北部より南部の方が約10cm深い。これは旧地形に影響されているものと考えられる。

また、検出状況では周溝は全周しておらず、東側でとぎれている。周溝がとぎれる部分は幅約1.5mの範囲で、周溝の底からの高さは5cmである。遺構の残りが悪いため積極的な根拠を欠くが、この部分が陵橋となる可能性が指摘できる。

埋土は暗灰褐色~暗灰色粘質土で、一定の期間滞水したと考えられるプライマリーな層は確認できなかった。埋土は粘質の強い土にやや砂質を含む土がブロック状に混在しており、自然堆積とは考えがたい。

周溝からは須恵器と埴輪の小片が多く出土した。特に埴輪については円筒埴輪以外にも蓋形埴輪の立筋りや器財埴輪、動物埴輪の脚部などが出土している。これらの遺物は、いずれも細片となって周溝全域から出土しており、接合は極めて困難である。



第8回 古墳周溝断面図

埴輪の出土状況は墳丘から転落したという状態ではなく、後世に擾乱を受けて細片となっていた。埋土の状況もこれを裏付けるものと判断できる。周溝内の最も新しい遺物は奈良時代の須恵器であり、周辺で検出された掘立柱建物等と同時期のものである。これらのことから、少なくとも奈良時代までは溝として機能した後、人為的に埋められたものと考えられる。

奈良時代の遺構

掘立柱建物 4

埋没古墳と戦国時代の濠が重なる部分で掘立柱建物を1棟検出した。桁行の柱のうち3基は戦国時代の濠によって完全に破壊されている。柱の掘方からは奈良時代の土師器が出土している。

掘立柱建物4は南北方向に棟軸を持つ 2×3 間の建物である。南北桁行5.8m、東西梁行3.6mで、これも掘立柱建物1と棟軸が揃う。柱穴の掘方は一辺40cm前後の隅丸方形を呈し、検出面より30cm前後残存している。柱痕の直径はいずれも20cm前後である。

土坑2（第9図）

第3トレンチ西端で長径2m以上、短径1.5m、検出面からの深さ28cmの土坑を検出した。土坑の断面形は浅い壇り鉢状で、埋土は暗褐色粘質土である。埋土中からは多量の炭片とともに須恵器、土師器が出土した。

遺物は大半が細片で図化できたものは少ないが、多量に投棄された状態で出土しており、廐棄土坑であると考えられる。上坑はやや浅くなりながらトレンチ西側の壁面にかかっており、全体は明らかでない。長梢円形の土坑になる可能性が高いと推察される。

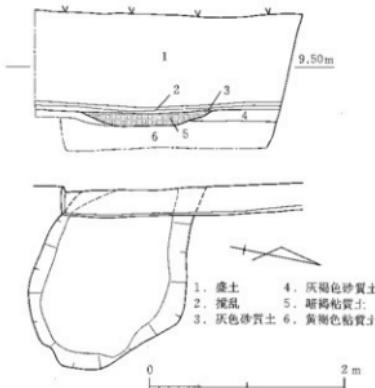
溝10

溝10は第3南北トレンチで検出した。溝の断面形はU字形で幅0.6m、検出面からの深さは約5~10cmであった。遺構の残りが悪く時期決定可能な遺物をえられなかったが、埋土は灰褐色粘質土で、その特徴から奈良時代の遺構であると考えられる。

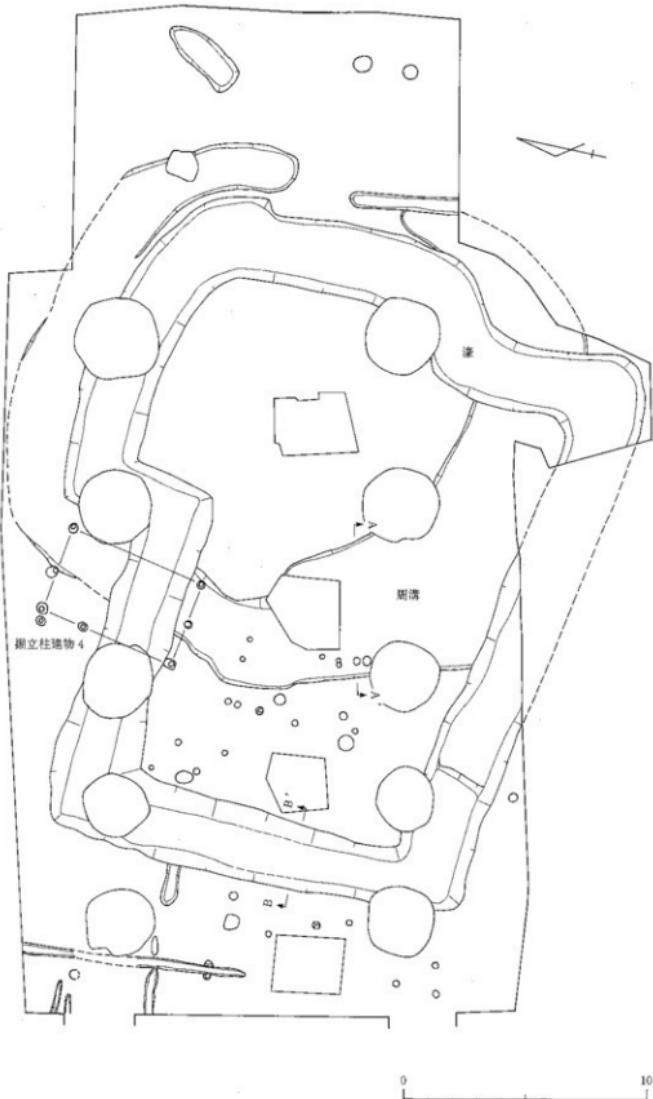
この溝を境として、これ以東では奈良時代とみられる遺構の検出数が極めて少なくなる。第2トレンチで検出した溝6と同じく、遺構群を区画する溝になる可能性がある。

その他の遺構

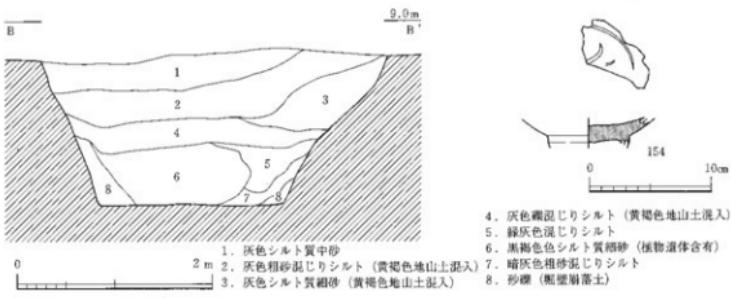
第3トレンチでも奈良時代と考えられる遺構を数多く検出したが、遺物には恵まれなかった。遺構埋土は暗褐色粘質土と灰褐色粘質土の二者があり、いずれも土師器須恵器の細片を含む。このことから、これらの遺構が掘立柱建物と同時期であることが推察できる。



第9図 土坑2平・断面図



第10図 第3トレンチ拡張区平面図



戦国時代の造構

濠（第10・11図）

濠は埋没古墳の周溝に重なるようにして検出された。濠の中央部が埋没古墳の中心とほぼ重なることから、古墳のマウンドを利用して築造されたものと考えられる。

この濠は北東部と南東部の2カ所に「折れ」部をもち、これらの「折れ」部によって北東方向に張り出し部を作っている。この濠の内部の規模は東西方向21m、南北方向12mで、張り出し部の規模は、幅8m、奥行きが4mである。

濠の断面形は逆台形で、いわゆる「箱堀」と呼称されている掘方である。その幅は上端で2.5~3m、下端で1.3~1.5mで、検出面からの深さは最深で1.6mである。濠は極めて硬質の伊丹礫層も直線的に開削している。このため自然崩壊あるいは崩落によって埋没したと判断できる層はほとんどなかった。

下層の埋土は黒褐色シルト質細砂で、動植物の遺存体を多く含んでいた。このことから濠内には一定の期間、水が滞留していたものと考えられる。

濠の埋土上層は灰色砂礫混じり細砂であり、地山の土をブロック状に含んでいる。最終段階にはこの濠は人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は極めて少なかったが、中国製青磁碗、丹波焼の細片など中世末に比定されるものが出土している。

濠の区画内では戦国時代の遺物や遺構は全く検出されなかった。これは濠の区画内にまだ古墳のマウンドが残っており、それを利用したためと推測される。ただし、濠の埋土からは古墳時代の遺物は全く出土していない。これらのことから濠の区画内には盛土がなされていたものと考えられる。

6. 第4トレンチ（第7図）

平成7年度調査区中で最も南に位置する東西14×南北5mのトレンチである。遺物はいずれの遺構からも細片が出土したのみで時期決定は困難であるが、遺構埋土の特徴は奈良時代の遺構に近い。

遺構はトレンチの西半でピットと溝を1条検出したのみである。これらのピットはいずれも浅いものばかりで、柱穴になるようなものはない。

このトレンチは第1トレンチと比べてやや標高の下がった位置にある。このためここでは、他のトレンチでは堆積していなかった第5層が認められる。遺構の埋土は第4層に極めて近く検出が困難であったため、このトレンチでは第5層上面で遺構検出を行った。

奈良時代の遺構

溝11

溝11はトレンチ西半で検出した南北方向の溝である。幅0.4~0.8m、検出面からの深さは25cmである。埋土は灰褐色粘質土である。断面形はやや不整形であるが、緩やかなU字形を呈する。遺物はほとんど出土していない。第4トレンチを南北に縦断するが、深さは一定ではなかった。第3南トレンチでもこの溝を検出することはできなかつたが、近現代の搅乱が及んでおり遺構の有無は明らかではない。

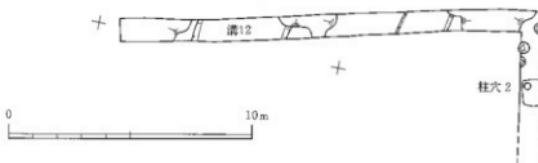
7. CおよびDトレンチ（第12図）

CおよびDトレンチでは古墳時代から奈良時代の遺構を確認した。特にDトレンチでは狭い調査区ながらも4基の柱穴の列を検出し、据立柱建物が少なくともこの周辺まで広がっていることを確認できた。

Cトレンチは幅1m、総延長47mのトレンチをクランク状に設定した。それぞれC西、C中、C東と呼ぶ。また、Dトレンチは幅1m、東西方向15m、南北方向45mで十字に設定した。このトレンチについては、交差点を中心としてD北、D南、D西、D東と呼ぶこととする。

古墳時代の遺構はC西で、奈良時代の遺構はC西、C中、D北、D南、D東で検出した。C東には遺構が存在しなかった。

原因としては第1トレンチ南半と同様の理由が考えられる。また、D北、D西でも遺構は検出できなかったが、こちらは近現代の搅乱によって深く削平されていたことが要因である。



第12図 C・Dトレンチ平面図

古墳時代の遺構

溝12（埋没古墳2）

古墳時代の遺構はC西トレンチで検出した。上半を近代の搅乱と奈良時代の溝によって削平され、失っている。

溝は幅4.0m、深さ20cmで、西側に中心をもって緩やかに弧を描く形になると推測される。埋土は暗黄褐色粘質土で、ややブロック状に暗黄褐色砂質土を含んでおり、プライマリーな堆積ではない。

遺物は須恵器と埴輪の小片が出土している。うち、須恵器の甕の胴部片（約1/4）が押し潰された状態で出土した以外は、すべて細片である。

遺物の出土状況、埋土の特徴等は埋没古墳1の状況と合致する。この溝が埋没古墳の周溝となる可能性がある。

奈良時代の遺構

Cトレンチでは溝1条とピット3基、柱穴1基を検出した。Dトレンチでは溝2条と、土坑1基、ピットを5基、柱穴5基を検出した。柱穴の内4基は軸線が揃っており、掘立柱建物になるものと考えられる。うち、Dトレンチの溝15は溝16に切られているが、いずれも7cm程度しか残っておらず、規模も不明である。

掘立柱建物5（第13図）

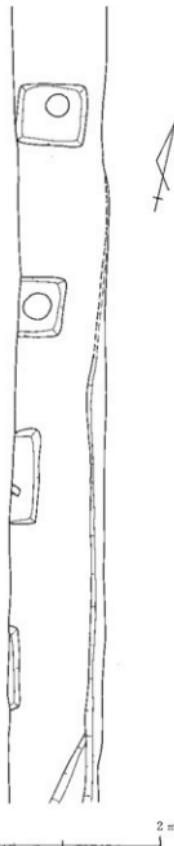
掘立柱建物5はD南トレンチで柱穴4基を検出した。建物のうち南北乘り3間6.4mにあたる柱列を検出したものと推測できるが、建物が調査区外にのびるため、その規模は不明である。

今回の調査区では建物の棟軸方向を知ることはできなかった。しかし、検出した柱列の軸線はほぼ磁北に一致すること等から、棟軸が掘立柱建物1と同一方向に揃う可能性が高いものと考えられる。

柱穴掘方は一辺0.6mの隅丸方形である。掘方は検出面より20～30cm前後残存していた。いずれも調査区の壁にかかる状態で検出しておらず、完全に検出できたものはない。柱痕は4基中2基で検出した。柱径は20～25cmで、柱痕の間隔は2mである。柱穴、掘方の規模、柱痕間隔等も掘立柱建物1とほぼ同規模である。

遺物はほとんど出土しなかったが、北から3番目の柱穴では、砥石（S3）が出土した。砥石は柱穴掘方の底面から約15cmほど浮いた状態で出土した。砥石は一面を上にした状態で、やや西方に傾いた形で出土した。砥石の東西の上縁は約5cmの高低差をもっている。

柱穴掘方の土層は第2層によって著しく変色しており、柱痕を確認することはできなかった。よって、この砥石が、柱を支える根石として転用されたものか否かは明らかにできなかった。



第13図 掘立柱建物5平面図

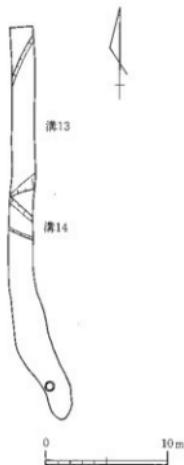
柱穴 2

柱穴 2 は C 中トレンチで検出した。柱穴掘方は一辺 0.8~0.9m の隅丸方形で、検出面からの深さは 45cm である。柱痕は長径 30、短径 25cm で、今回の調査では最も大きな柱穴掘方である。

柱穴 3

柱穴 3 は D 東トレンチで検出した。柱穴掘方は一辺 0.5~0.55m の隅丸方形で、検出面からの深さは 20cm である。第 2 層によって著しく変色されており、柱痕を検出することはできなかった。

調査区の壁面にかかる状態で検出しており、その詳細は不明である。検出した部分からのみの判断ではあるが、この柱穴の軸も磁北にあっており、掘立柱建物 1・5 と棟軸が揃う建物の可能性がある。この建物は D 東トレンチよりも東側へも広がる可能性があることが指摘できる。



8. G トレンチ（第14図）

本報告のうち最も南に位置するトレンチである。幅 1m、長さ 16m のトレンチを設定したが、既設の埋設管のためにトレンチの形状が不整形となった。

このトレンチでは溝 2 条とピット 1 基を検出した。溝は古墳時代と奈良時代の 2 時期のものがあるが、耕作土等による削平が著しく、遺構はほとんど残っていなかった。

第14図 G レンチ平面図

古墳時代の遺構

溝13（埋没古墳 3）

溝10の断面はきわめて浅くゆるやかに広がる U 字形で、トレンチを東西方向に横断する。溝は幅 4.5m、検出面からの深さは 20cm である。溝は東北方向に中心をもって緩やかに弧を描いている。埋土は暗茶褐色粘質土で、やや鉄分を含む。

溝からは多量の埴輪が細片となって出土した。遺物はいずれも細片で接合することも困難である。また、これらの遺物はいずれも投棄されたり、転落したという状態ではなく、土砂とともに人为的に埋められたという状態で出土している。遺物の出土状況、埋土の特徴等は埋没古墳 1 の状況と合致する。この溝は埋没古墳の周溝となる可能性がある。

奈良時代の遺構

溝14

溝14は幅 1m、検出面からの深さ 10cm 足らずで、トレンチを東西方向に横断する。断面形は極めて浅い皿状である。埋土は暗茶褐色粘質土で、その特徴と、わずかに得られた遺物の小片から、奈良時代の遺構と考えられる。溝は古墳時代の遺構と切り合うようであるが、詳細は不明である。

第2節 遺物

今回の調査では土師器・須恵器・陶器・磁器・埴輪・石器等が出土している。以下、実測できたものについて、土器・瓦・土製品・埴輪・石器・石製品にわけてその概要を述べることにする。

1. 土器・瓦・土製品

(1) 1トレンチ出土遺物

講4 (図版1、写真図版7)

1は須恵器の杯B身である。口縁部を欠き、体部と底部の屈曲は明瞭で、高台を巡らせる。2は瓦器椀片である。かなり扁平な体部を持つと思われ、高台もやや退化している。外面に指頭圧痕が認められる。3は丸瓦片である。内面に布目が残り、端部はヘラによる面取りが認められる。4は平瓦である。内面には布目が、外面にはタタキの痕跡が認められる。

講5：東西方向 (図版1・2、写真図版7・8)

5～27・32は須恵器、28～31・33～35は土師器、36・37は平瓦である。

5は杯H身である。立ち上がりは短くなり、内面に端部を持つ。体部も扁平化し、平底気味となり、ヘラケズリの範囲も半分程度となっている。6は口縁内部に明瞭なカエリを持つ蓋である。頂部が失われているため、つまみの有無は不明である。7は口縁端部は下方に短く屈曲する蓋で、つまみのないものである。8は天井部がほぼ平坦に成形され、扁平なつまみを持つ蓋である。9は丸みを帯びた天井部を持ち、口縁内部に矮小化したカエリを持つ蓋である。10は平坦な天井部に扁平なつまみが付き、口縁端部をわずかに下方に屈曲させる蓋である。11はやや丸みを帯びて立ち上がる体部と外方に踏ん張る高台を持つ杯B身である。12・13は直線的に伸びる体部と口縁部を持ち、端部をわずかに外に向ける高台が付く杯B身である。14は直線的に伸びる体部と口縁部を持つ杯身である。15は端部をやや拡張した高台が付く杯身である。16は体部と底部の屈曲部があまり明瞭ではなく、高台が付く位置がうちに寄った杯身である。17は直線的に伸びる口縁部と体部を持ち、平底の杯A身である。18は球形の体部に外側に開く頸部が付き、口縁部は外側に屈曲した後端部を上下に拡張する壺である。自然釉が付着している。19は球形を呈する壺の体部である。体部上半にカキ目を施し、頸部・肩部・体部中央にそれぞれ四線を1条施す。自然釉が付着している。20・21は長頸壺の口頸部である。20には口縁部直下と頸部中央に2条の凹線が巡っている。21には自然釉が付着している。22は壺である。肩が張ったやや扁平な体部を持ち、頸部は細く、口縁部は欠けるもののラッパ状に開くと考えられる、口縁部と頸部の間に明瞭な段をなす。底部には回転ヘラケズリを施す。頸部に2条・肩部に1条の沈線を巡らす。口縁部下にヘラ書きがある。頸部から肩部にかけて自然釉が認められる。23～27は須恵器の甕である。23は口縁端部を内側に拡張している。24は直立気味に頸部が伸び、口縁はやや外反する。口縁端部を上下に拡張して、外側に面を持つ。体部外面には格子目のタタキが、内面には青海波状のあて具痕跡が認められる。25は大型の口縁部片である。端部は下方に拡張され、ヘラ書き直線文と斜め方向の連続単線を組み合わせた文様を施している。26も大型の口縁部片である。口縁端部は内側につまみ上げ、同時に外側には粘土紐を付加して、下方にも拡張する。沈線を2条巡らせ、その上下に部分的ではあるが波状文を施している。

27は肩の張ったやや縦長の体部から外反して開く口縁部を持つ、口縁端部はさらに外反し、上下に拡張する。口縁部直下に波状文を巡らせてある。体部外面には縦のタタキ目が残り、内部には青海波状のあて具痕跡が認められる。32は壺の耳である。

28は外形する体部を持ち、口縁端部を内側に巻き込む杯Aである。器面の状況が悪く、調整は不明である。29は大きく外に開く高杯の杯部である。ヨコナデを施している。30・31は高杯の脚部片である。脚柱部はヘラケズリによる面取りを行う。33は肩の張らない体部から大きく開く口縁部を持つ壺である。壺部は内側に肥厚する。外面にハケ目の痕跡があり、口縁部はヨコナデを施している。34は銅付き壺の銅部である。ヨコナデを施している。35は半球形に近いと思われる体部に外反する口縁部を持ち、端部を内側に少し曲げる鉢Aである。調整は磨減が著しく不明である。

36・37は双方とも内面に布目が残る。ただし、36は外面にタタキの痕跡が残り、37はナデを施して、タタキを消している。

溝5：南北方向（図版3、写真図版8）

38～43は全て須恵器である。

38は平坦な頂部から傾斜して、周辺は下方に短く折れる杯B蓋である。丸みのある宝珠つまみを付ける。頂部には回転ヘラケズリを施している。39は底部がやや下方に膨らみ、高台は短く外側に踏ん張る杯B身である。40は平坦な底部から外傾して立ち上がる体部を持つ杯Aである。41は肩に稜を持ち、やや扁平な体部で、外側に踏ん張る高台が付く。口縁部を欠くが、壺Kと思われる。42は平底で、やや扁平な体部を持つと思われる壺である。43は若干尖り気味の底部と内擣する口縁部からなる半球形の鉢Aである。口縁部は回転ナデ、体部は回転ヘラケズリを施している。

包含層出土遺物（図版3、写真図版8・9）

44～52は須恵器、53・54は平瓦片である。

44はつまみを付加しない扁平な頂部を持ち、内面にカエリを持つ杯蓋である。45は傾斜する天井部を持ち、内面にカエリを持つ杯蓋である。外面に自然釉が付着する。46は平坦な頂部から傾斜する天井部を持ち、内面にカエリを持つ杯蓋である。47は平坦な底部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ杯G身である。48は外に踏ん張った高台を持つ杯B身である。49は底部から斜めに立ち上がる口縁部を持つ杯B身である。底部はヘラ切りで、高台は短く外側に踏ん張る。50はやや器高が低い杯B身である。底部はヘラ切りで、高台は短く外側に踏ん張る。51は平坦な底部から、屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ杯A身である。底部はヘラ切りの後、ナデを施している。52は肩の張らない丸みを帯びた体部から、直線的に立ち上がる短い頸部と外反する口縁部を持つ壺である。肩部に沈線を1条巡らしている。

53・54とも内面に布目が残り、外面にはタタキが認められる。

(2) 2トレンチ出土遺物（図版3・4、写真図版9・11）

55～75は須恵器、76～80は土器器、81は土製品である。

55～57は杯H蓋である。55は平坦な天井部から体部は丸く伸び、口縁部は直線的になる。天井部にヘラ切りの後ナデを施す。56は天井部に回転ヘラケズリを行っている。57は天井部が丸くなっている、回

転ヘラケズリを施している。58は平坦な頂部から斜めに体部が伸びる。頂部につまみの痕跡があり、内面にはカエリが認められる杯B蓋である。59は丸みを帯びた体部を持ち、頂部に扁平なつまみを持つ蓋である。カエリは大きく下方に伸びている。60~67は杯E身である。立ち上がり部は短く、内傾する。底部の形態には60~63・65のように丸みを帯びたものと64・66・67のように平坦気味になったものがあるが、底部の調整は全ての個体で回転ヘラケズリを施している。68は平坦な底部から丸く立ち上がる口縁部を持つ杯G身である。底部はヘラ切りし、体部には回転ナデを施している。69・70は杯B身である。底部はヘラ切りし、外側に踏ん張る高台を付加する。71は扁平な体部に短い広口の口縁部が付く壺Gである。回転ナデによる調整を行う。72はやや扁平な球形の体部に細い頸部が付く壺Xの破片である。体部に凹孔を穿ち、そこに頸部を接続している。73外側に踏ん張る高台が付く壺Kの底部である。高台には4箇所に焼成前穿孔が認められる。底部には回転ヘラケズリを施している。74はイチジク型の体部を持つ甕である。底部はヘラケズリの後ナデを施し、肩部下に櫛描列点文を施している。75は外側に開いた後、端部付近で軽く内彎する広口の口縁部を持つ甕である。外面に緑色の自然釉が認められる。

76は扁平な蓋のつまみ部である。77は丸い底部と外反する口縁部を持つ杯Eである。内外面ともナデで仕上げている。78は丸みを帯びた底部を外反する口縁部を持つ杯Eと思われる。磨滅が著しく、調整は不明である。79・80は緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。80は外面にハケを施している。81は管状土錐である。

(3) 3 トレンチ出土遺物

埋没古墳1：周溝（図版4、写真図版10）

82~96は須恵器、97は陶器、98~102は土師器である。
82は丸みを帯びた天井部を持ち、器高が高い杯蓋である。天井部と口縁部とを分ける稜はやや短い。口縁端部は内傾している。天井部には回転ヘラケズリを施す。83は立ち上がり端面が内傾化して段状になり、平坦な底部を持つ杯身である。底部はほぼ全体に回転ヘラケズリを施している。84は丸みを帯びた天井部を持ち、内面にカエリを持つ杯蓋である。天井部にはつまみの痕跡があり、回転ヘラケズリを行っている。85は平坦な天井部を持ち、斜めに伸びる体部を持つ杯蓋である。扁平なつまみが付き、口縁内面に段を持つ。外面調整は自然釉の付着により不明である。86は平坦な天井部に扁平なつまみが付く杯蓋である。87は外側に踏ん張る高台を持つ杯B身である。底部はヘラ切りを行っている。88は大きく踏ん張った高台を持ち、壺の底部と思われる。底部はヘラ切りの後ナデを施している。89も台付壺の底部である。体部外面にヘラケズリを施している。90は扁平な球形の体部を持つ台付長頸壺と思われる。肩部に沈線文を2条巡らせる。高台は強く外側に踏ん張り、体部下半はヘラケズリを行っている。肩部外面と底部内面に緑色の自然釉が認められる。91は肩部が丸みを帯び、把手を持たないと思われる平瓶である。外面に自然釉が認められる。92は扁平な球形の体部である。体部下半は回転ヘラケズリ、上半は回転ナデを行う。外面に自然釉が付着する。穿孔部分を欠くが、甕と思われる。93~96は甕である。93は外反して開き、端部でやや内彎する口縁を持つ。体部外面には格子目状タタキがあり、内面には当て具痕跡が認められる。94は肩の張った体部を持ち、外反する口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張し、頭部は1条突帯で区画され、その上下に波状文を巡らせる。体部外面は格子目状タタキが見られ、肩部にはカキ目を施す。内面は当て具の痕跡をナデ消している。95は頸部のくびれが小さい。体部外面には格子目状タタキがあり、内面には当て具痕跡が認められる。96は大きく外反する広口の口縁部を持つ大

形品である。口縁端部は外側に面を持ち、直下に突帯を巡らせる。体部外面は平行タタキがあり、内面には当て具痕跡が認められる。

97は攝り鉢の口縁部片である。備前焼と思われる。

98～101は杯Cである。98はやや平坦な底部から丸く立ち上がる体部を持つ。ヨコナデとナデで仕上げている。99は口縁部にヨコナデを施し、内面に放射状の暗文が認められる。100・101は口縁端部がわずかに内側に肥厚する。102は平らかな底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ皿Aである。口縁端部内面に段を持つ。焼成は不良である。

濠跡出土（第11図、図版4、写真図版11）

103は平らかな底部から丸く立ち上がる口縁部を持つ須恵器の杯Aである。底部はヘラ切りを行い、体部は回転ナデを施す。104は平らかな底部に高台が付く須恵器の杯Bである。底部はヘラ切りを行う。154は最下層から出土した青磁碗の底部である。釉は厚く、発色はやや淡い緑色を呈する。見込みに印花および界囲らしきものがある。背の高い輪高台が付くと思われ、内面に露胎部が認められる。

土坑2出土（図版5、写真図版10）

105は平らかな底部から外傾する体部を持つ須恵器の杯Aである。焼成はやや悪く、重ね焼きの痕跡が口縁部付近に認められる。底部はヘラ切り後ナデ、体部には回転ナデを施す。106は平坦な天井部から折れ曲がって垂下する縁部を持つ須恵器の蓋Cである。天井部には回転ヘラケズリを施している。107は平らかな底部から外傾気味に伸びる体部を持ち、口縁端部を内傾させる土師器の杯Aである。口縁部にヨコナデを行う。108は平らかな底部から外傾する口縁部を持つ土師器の杯Aである。口縁部にヨコナデを行い、他の部分はナデで仕上げる。

包含層出土（図版5、写真図版10）

109～125・130は須恵器、126～129・131～135は土師器である。

109・110は杯日身である。立ち上がりは内傾し、底部は丸みを帯びる。底部の2分の1に回転ヘラケズリを施す。110は外面に少し灰をかぶる。111～113は杯B蓋である。111は平坦な頂部から斜めに伸び、縁部を下方に折り曲げる。頂部に回転ヘラケズリを行う。112は頂部と縁部との境に稜を持つ。頂部に扁平なつまみが付いたと思われる。頂部は回転ヘラケズリ、縁部は回転ナデで仕上げる。内面に灰がかかる。113も頂部と縁部の境に稜を持つ。回転ナデを施す。114は平らかな底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ杯Aである。底部はヘラ切りの後ナデ、体部には回転ナデを施す。焼成はやや軟質である。115は平らかな底部に高台が付き、外傾する体部を持つ杯B身である。底部はヘラ切りの後ナデ、体部には回転ナデを施す。116～118・120も杯B身である。119は厚い器壁を持ち、平らかな底部に直立する高台を付ける。体部外面にヘラケズリ、壺の底部と思われる。121は丸みを帯びた底部に外に踏ん張った高台が付く。外面にハケを施し、内面には当て具痕跡が認められる。壺の底部である。122は扁平な球形の体部を持つ壺である。底部は回転ヘラケズリを行い、体部には回転ナデを施す。肩部にはカキ目が認められる。123は肩の張った体部に直立する短い口縁を持つ壺Aである。回転ナデを施し、外側頸部以下に灰をかぶっている。124は外反して伸びる壺の口縁部である。端部を上下に拡張し、口縁部下に突帯を1条巡らせる。口縁端部から内面にかけて灰をかぶる。125は円面鏡の圓台である。拡広がりで、

陸部・海部を欠く。外堤の下端に突帯が付き、圓台中位には沈線を巡らせる。破片であるため、形態・數は不明であるが透かし穴が穿たれていた。回転ナデを施し、内面に灰をかぶる。130は甕あるいは甌の把手である。長方形の板状を呈している。

126は平らかな底部に低い高台の付く杯Bである。127・128は平らかな底部から外傾する口縁部を持つ杯Aである。127は口縁端部をわずかに内側に丸める。128は外面に指頭圧痕が認められる。129は平らかな底部から外反する短い口縁部を持つ皿Aである。ヨコナデで仕上げている。131・132は平面が三角形を呈する牛舌状の把手である。133は外反する口縁部を持つ甕である。器面の状態が悪く調整は不明である。134・135は大きく外に開く口縁部と丸みを帯びた体部を持つ鍋である。134は内面にハケの痕跡があり、口縁部はヨコナデを施す。135は口縁端部は外側に面を持つ。体部外面には指頭圧痕とハケの痕跡が認められ、口縁部はヨコナデを施す。

(4) 4トレンチおよび第1・4次調査出土遺物

4トレンチ出土（図版6）

136は平らかな底部から外反して伸びる口縁部を持ち、大きく踏ん張った高台を付加する杯B身である。底部はヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデを施す。137は底部から直線的に伸びる口縁部を持つと思われる杯Bである。高台の踏ん張りはやや弱い。底部はヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデを施す。138は小ぶりで球形の体部に直線的に立ち上がる口頭部を持つ甕である。体部は回転ナデ、絶ぎ足した頸部はヨコナデを施す。139は甕の口縁部である。端部を上下に拡張している。140は高杯の脚柱部である。2条1単位とする沈線が3箇所に認められる。内面にはしばり痕が顕著である。

第1次調査出土（図版6）

141は須恵器の甕の口縁部である。端部を内面に拡張する。外面には1条の波状文が巡る。142は平らかな底部から外反して開く口縁部を持つ土師器の杯Aである。143は内面に灰色の釉を掛けた陶器の小皿である。外面はヘラケズリで形成する。

第4次調査出土

Cトレンチ（図版6、写真図版11）

152は胴が張り、外反する広口の口縁部を持つ須恵器の甕である。口縁部はヨコナデを施し、口唇部下に細い突帯を貼り付ける。体部は外面に格子状のタタキ目が残り、内面には同心円状の当て其痕が認められる。焼成は不良で、溝12（埋没古墳2）から出土した。

Dトレンチ（図版6、写真図版11）

147は平らかな底部から外傾して立ち上がる口縁部を持つ土師器の皿Aである。内面に暗文を施している。149は長腹と思われる体部から大きく開く口縁部を持つ土師器の甕である。体部外面にハケ目が残り、口縁部はヨコナデを施す。147・149とも掘立柱建物5の柱穴から出土した。

146は平らかな底部から外傾して伸びる口縁部を持ち、外側に踏ん張る低い高台が付く須恵器の杯B身である。底部外面はヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデ、底部内面はナデで仕上げる。溝15・16精査時に出土した。150は大きく開く須恵器の口頭部である。口縁を欠き、中位に沈線を1条、体部との境

に突帯を1条巡らせる。外面には緑色の自然釉が認められ、内面にも灰をかぶる。151は平らかな底部を持ち、肩の張った扁平な体部である。口縁を欠くものの、短頸壺と思われる。底部はヘラ切りの後ナデ、体部下端にはヘラケズリ、上半は回転ナデを施し、肩部には自然釉が認められる。150・151とも溝15から出土した。153は土師質の管状土錐である。包含層から出土した。

Eトレンチ（図版6）

144は平坦な頂部から斜めに伸びる縁部を持ち、罐部は下方に折り曲げる須恵器の杯B蓋である。頂部外面には回転ヘラケズリ、内面はナデ、縁部内外面は回転ナデを施す。Eトレンチの掘立柱建物3の柱穴から出土した。

F南トレンチ（図版6、写真図版10）

145は平らかな底部に外側に踏ん張る高台が付く杯B身である。底部はヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデを施す。溝6から出土した。148は平らかな底部から丸く立ち上がる体部を持つ土師器の皿Aである。柱穴1から出土した。

2. 塗輪（図版7～9、写真図版11～14）

古墳の周濠を中心に、円筒埴輪・形象埴輪が出土した。後世の開発等の影響を受けた古墳の遺存状況を反映して、出土量は少ない。また、個々の遺存状態も大半が小片化しており、良好なものはほんの僅かであった。

埴輪はいずれも無黒斑で、硬性の焼成である。いずれも褐色系の色調を呈し、いわゆる「須恵質焼成」の個体は見られなかった。胎土は0.5～1mm程度の砂粒が含まれるものがあるが、大半は精良といえる。以下、種別ごとに出土遺物の概要を記す。

(1) 円筒埴輪（H 1～25）

いずれも部分的な遺存状況である。口縁部・底部の破片も見られるが、ほとんどはタガ周辺のみが遺存する小破片の状態で、全容について観察するのは非常に困難な状況であった。各部位ごとの特徴について観察を加える。

口縁部の破片は3点出土したが、いずれも口縁罐部付近のみで、遺存する口径も全体の1/8程度と、極めて僅かである。形態は、体部から口縁へ開き気味に伸びるもの（H 1、2）と、直立に近いもの（H 3）がある。

H 1は復元径21.8cmを測る。開き気味に伸びる体部は、さらに口縁罐部付近でわずかに外方へ屈曲する。罐部は横ナデを施して、断面を三角形気味に整形する。外器面には斜めハケがかなり密に施されている。口縁罐部付近はハケ目を切って横ナデで調整している。回転による横ナデを加えて、シャープに仕上げている。H 2は復元径26.6cmを測る。口縁罐部は端面上にナデ調整を施し、外側の罐部は外方へとわずかに引き出される。外器面には、小規模なタテハケが密に施される。H 3は口縁部にかけて真っ直ぐ立ち上がる体部をもち、円筒状に近い形態を有する。口縁罐部付近には内外面とも横ナデ調整を施し、漫面を平底に整形する。特に内面側は罐部に沿って強い横ナデが見られる。

なお、円筒埴輪の口縁部と考えられる破片のうち、朝顔型円筒埴輪に比定できるものは見出せなかつた。

出土遺物の大半がタガ周辺部分の小破片ということもあり、体部については不明な点が多い。器面の調整は、外側が斜めもしくは縱方向のハケ目によって、内側はナデで成形されるものが大半である。スカシについても全体が遺存する資料はなかった。形状はいずれも円形で、直径は大きくタガ付近まで及ぶと見られる（H 8, 9）。H 7 ではスカシの一部が2箇所認められたが、上下の位置をずらして配置している。

タガ2段分を遺存する個体が1点（H 4）あるものの、本来の段数について示す資料は見られなかつた。小規模で突出度も低く、断面の形状は台形のものが最も多い。上下端部は器面への接合時に強いナデを受けて幅広となる。また端面上にもナデが施されてM字状を呈するものもあるが、三角形のものは出土していない。またH 5は、タガの上面に強い押圧が加えられて偏平となつていて、断続ナデ技法の痕跡であり、最下段のタガにあたるものであろう。

底部の状況も他の部位と同様、遺存状況が悪い。底径が復元できたのは、最も良好に遺存するH 25だけであった。体部にかけてハの字状に開き、端部は真っ直ぐに収める。端部にそって外面に回転ナデを加えて仕上げる（H 23・24）ほか、端面は板状工具等で平坦に整形する。

底部外面付近において、板状の押圧痕が僅かに残るもの（H 22）がある。器面の剥落が著しく、底部付近において痕跡を認める程度であるが、底部付近の形状を調整するための手法と考えられる。

以上、各部位ごとに特徴を観察してきた。最後に手法的な特徴についてまとめておくと、器面調整はタテハケもしくはナナメハケを施し、タガ部の上下に沿って、接合時のヨコナデを施すものの器面調整そのものに横ハケを用いた痕跡は認められなかつた。また内面については、ユビナデの凹凸が認められる以外に、その他の調整痕は存在しなかつた。

タガの突出度は比較的高いものの、断面は台形で華奢な作りのものが多い。また断続ナデ技法の存在は、技法上から埴輪の製作時期を考える大きな手がかりといえる。

円筒埴輪の器形については判然としないが、口径20~25cm前後、底径15cm前後の規模と考えられる。また器高については、タガ2段分を遺存するものや円孔の痕跡を2個所持つ遺物から、2段もしくは3段のタガを有し、全長50cm前後的小規模なものと推定できる。

断片的な遺存状況であったため、観察・検討を進める上で大きな制約を受けたが、以上の特徴から南本町1号墳出土の円筒埴輪は6世紀前葉の特徴を有すると考えられる。

(2) 形象埴輪

蓋・家・盾などが出土した。出土個体数の最も多いのは蓋形埴輪と盾形埴輪で、形象埴輪と認識できた破片のほぼ半数を占める。しかし小片化は円筒埴輪以上に顕著で、形態の特徴について把握できた個体は存在しない。他の器種についても同様の状態であり、後世の地形変更による影響が顕著に現れたといえる。以下、出土した種別ごとに特徴を述べる。

a. 蓋形埴輪（H 26~42）

極めて限定的に遺存する破片も含めて、数多く出土した。大半は十字立ち飾り部の破片で、他の部位についても少數ながら存在するが全体の形状がわかる遺物は存在しない。

飾板の表面には直弧文状の線刻（H29）を施し、端部が遺存するものについては、縁に沿って線刻（H26・27）を施す。裏面には表面と同じ線刻を施すもののはか、全く線刻が認められないもの（H30）もあった。立縫りの基部に近づくにつれて装飾も複雑になると考えられるが、断片的な遺存状況である上に、焼成の甘いものが多く、線刻の細部は剥落・消失したものが多いため、基部では（H38～40）上端側に数条の線刻を施す以外に、目立った線刻は施さない。形状・調整ともに粗雑な印象を受け、退化傾向が色濃く見受けられる。

体部側については、受部から笠部にかけて良好に遺存する個体（H42）が存在し、状況を知ることができる。

笠部は長い頭部と大きく開く偏平な形態と呈する。笠部の高さは5.2cm、直径45cmを測る。受け部の付け根から笠の口縁へは大きく開き、直線的に縁部へ至る。端部は屈曲してそのまま外方へ引き出され、幅1.5cmの鶴状を呈する。笠部については内・外側ともにハケ目による調整を施す。また鶴状になった端部部分にはナデによる調整を行なう。

笠部と口縁部の境界にあたる内面に、体部との接合部分が遺存し、痕跡から体部上端の径は13.6cmを測る。以下を欠損することから、体部に関する詳説が不明である。

受部の径は11.2cm、高さは7.8cmを測る。体部から緩やかに外反し、口縁部に至る。口縁端部は外側に肥厚し、端面はナデによって平坦に整形する。外面には笠部から連続する右上がりのハケ目、内面はナデによる調整を施す。受部と考えられる破片はもう一点（H43）認められる。形態は若干異なり、頭部から真っ直ぐ上方に立ちあがって口縁付近で大きく開く。器壁は内外ともに摩滅が著しいが、内面にはナデの調整痕と思われる凹凸があり、また内面にはハケ目がわずかに遺存する。頭部以下を欠損するため全容については不明だが、器壁の厚さや調整手法から蓋形埴輪の受け部と判断した。

b. 家形埴輪（H43・44）

堅木と考えられる粘土棒がある（H43）のみで、他の部位は出土していない。直径3.5cm、全長12.8cmを測る円柱で、中空部は存在しない。わずかに弓状の反りがみられ、反りの頂点には屋根への装着部にあたる平坦面を作り出す。同形状の破片はもう1点見られる（H44）が、一方を欠損しており詳説は不明である。

c. 蔽形埴輪（H46～62）

板状の断面を持つ破片で表面に線刻を施した破片のうち、蔽形埴輪の一部と考えられる破片は数多く出土しているが、全容のわかる資料は見られなかった。特に小片化が顕著で、いずれも極めて限られた部分が遺存するに過ぎない。

表面の線刻には、2条の平行線に斜線を施したもの（H47）が界線の一部と考えられる。他には周縁に沿って沈線を施すもの（H46）や斜めに平行線を刻むもの（H49、51）もある。線刻をとどめる破片のうち、比較的大きなものに、H53がある。円弧状の周縁が僅かに遺存し、表面には弧文状の線刻を数条配する。蓋形埴輪の十字立ち飾りの一部である可能性もあるが、欠損する側において少しづつ厚みを増すことなどから、盾部と円筒部の接合部分の可能性を鑑みて蔽形埴輪に比定した。また周壁をすべて欠損し、1条だけ線刻を施すもの（H48、60）については、部位の特定には至らなかった。

板状の断面を持つものが多いことから、大半が鰐部に該当すると思われる。円筒部の様子や鰐と円筒

の接合方法を示す破片が存在しないため、全体の形状について推定できる要素は得られなかった。

d. 螺形埴輪（H 63～66）

矢筒部分を中心に、4点の破片が出土した。いずれも板状の断面形で、器壁はかなり薄く、裏面に突帯などを有する。軟質の土師質焼成であった。

表面に直弧文（H 63・65）や、鐵を抽象化した線刻（H 64）が施されている。調整痕は大半が擦り消されているが、突帯などの縦ぎ目にハケ目の痕跡が遺存する。それぞれ接合はできなかつたが、表面の色調や器壁の様子から、同一個体の可能性が高い。またH 66も、線刻を持たないが色調・器壁の厚さなどが酷似することから、同一個体の突帯部分と推定した。

e. 動物形埴輪（H 67～71）

形象埴輪の脚部片は5点出土した。いずれも体部以上を欠損するが、形状や縫部の特徴からある程度の器種比定が可能である。

外面にハケ目が施されたもの（H 67）は体部との接合部分が遺存しており、馬形埴輪の脚部と考えられる。

円柱形のものは、体部に向かって少しづつ聞くもの（H 70）と、ほぼ直線に伸びるもの（H 71）がある。前者は、接地面の一部を引き出して足先を表現しており、四肢を持つ動物である可能性が高い。後者は特別な表現を持たないが、円柱に近い形状から見て人物埴輪の足を想定させる。

小規模な脚部（H 68・69）は体部に対し逆円錐形の形態を持ち、小動物の脚と考えられる。

当古墳から出土した形象埴輪は、円筒埴輪と比較して焼成があまい。外内面ともに赤褐色を呈し、軟質である。表面に施された線刻が消失するものが多く、また周縁の縫部も純化するなど、摩滅が顕著に認められる。

その他、表面に線刻を持つものや特徴的な形狀から、形象埴輪の破片と考えられるものの、器種を特定できなかつた破片が多い。円筒埴輪と同様、断片的な状況を踏まえた上で、形象埴輪のうち、良好な遺存状態を示す蓋形埴輪と螺形埴輪の検討を中心に検討を加え、まとめとする。

蓋形埴輪については、受部から笠部にかけてほぼ完全な形で遺存した資料から、比較的詳細な観察ができた。笠部は外側はほぼ全面にわたって、笠部の裏面にも、右上方向へのハケ目を施す。外面のハケ目の間隔は細かく、比較的丁寧な調整であるが、内面は施す範囲も限られ粗雑な印象も受けける。笠部には肋木の存在が認められず、笠骨を表現した線刻も見られないなど、「笠」の表現にはかなりの簡略が窺える。形態から高機分類の2類、線刻の消失などから五期に該当すると考えられる。

螺形埴輪は、矢筒部の一部と考えられる破片が出土しているのみで、全体の形態や円筒部と背板の接合部などの様子は分からぬことから、形態における特徴は検討できない。線刻には鐵と見られる表現や、直弧文が認められる。破片はすべて板状で、L字に屈曲する内側に直弧文を施した破片の存在から、矢筒部は箱状だったと考えられる。

鐵の表現は当古墳では単なる矢印状となり、著しく抽象した表現を探る。また直弧文もまとまりがなく、全体に粗雑な印象を受ける。近隣での事例として、尼崎市園田大塚山古墳の螺形埴輪と比較すると、鐵の表現は線刻となるものの鐵身部やを意識するなど、当古墳よりも写実的な様相を呈する。形態編年

による詳細な検討は加えられないが、箱型の矢筒部の存在から1類で、簡略化された表現からもっとも終末の型式であろう。

以上の検討の結果、南本町1号墳の形象埴輪は最終末に位置づけられる、6世紀前半の所産と考えられる。また確認した器種には、蓋・家・盾・飼・動物があり、うち動物形埴輪には、脚部の形態から馬・人物・小動物が存在したと考えらる。比較的多様な形象埴輪が存在していた可能性が高い。墳丘規模と比較して、豊富な形象埴輪が存在する点は、当古墳の性格を考える上で注目すべき点であろう。

3. 石器・石製品（図版5・6、写真図版11）

S1・S2はサスカイト製の石鎚である。いずれも風化が著しい。S1は三角形を呈する平基式である。長さ23.5mm、幅13.4mm、厚さ3.7mm、重さ0.9gを測る。S2は先端と奥端を欠く凹基式である。長さ25.5mm、幅14.0mm、厚さ3.2mm、重さ0.6gを測る。3トレンチの包含層から出土した。形態から見て、弥生時代に属するものと考えられる。S3は玄武岩製の砥石である。両端を欠損しているが、本来はやや歪んだ方柱状を呈していたと考えられる。3面に明確な使用痕がある。使用痕の認められる面は中央がくぼみ、表面は極めて平滑である。残りの1面についても擦痕が認められる。Dトレンチの掘立柱建物5の北から3番目の柱穴から出土した。

第4章　まとめ

第1節　遺物

1. 土器

当遺跡からは古墳時代から中世にいたる土器が出土している。その中でも、古墳時代後期、飛鳥～奈良時代にかけてのものが、中心で占めている。

第1トレンチ

溝4・5、特に溝5から多くの遺物が出土している。溝4では平城Ⅱ期に属する杯B身の他、13世紀後半に位置付けられる瓦器底部が1点含まれている。

溝5の須恵器には1点であるが杯H身が含まれ、杯G蓋と思われるものもある。しかし、杯の多くを占めるのは杯Bである。蓋は内面のカエリは消失し、扁平となり、身についても高台の踏ん張りが小さく、形態的に後出の要素を持つ。長頸壺（壺K）は文様を持つものと持たないものがあるが、体部の稜が明確になった個体もあり、形態から見て奈良時代前半に位置付けられる。壺Lも同様である。壺も小型化・無文化が進んでおり、最終末の形態である。鉢Aも1点出土している。土師器では杯Aの口縁端部に巻き込みが見られる。高杯脚部もヘラケズリによる面取りが認められる。鍋Aや燭付き壺と言った煮沸具も存在している。これらの点から、溝5出土の土器はほぼ平城Ⅱ期に相当する。包含層出土の土器もほぼ平城Ⅱ期に相当するが、実測できなかった資料には古墳時代の須恵器・埴輪片も含まれていた。

第2トレンチ

造構から出土した土器は少ないので、包含層出土遺物では須恵器の杯H身蓋の存在が目立っている。身の底部には丸底のものと平底傾向のものがあるが、いずれもヘラケズリが認められる。蓋の方にはヘラケズリ・ヘラ切りの両者が認められる。杯G・杯B・甌・壺L・壺K等も認められるが、概ねT K 217型式あるいは飛鳥Ⅱ期の範疇に収まると考えられる。また、1トレンチと同じく、細片ではあるが古墳時代の須恵器・埴輪片も含まれていた。

第3トレンチ

古墳周溝から出土した82・83は身・蓋とともに形態的に見てM T 15型式に相当する。93～95等の甌も同時期のもので、古墳の築造に伴うものと考える。これらとは別に須恵器の杯B・杯G・壺K・平瓶の他、土師器の杯A・皿Aが出土しており、これらは平城Ⅱ期の範疇に収まるものと思われる。あと、中世備前焼の壺り鉢片がある。

土坑2からは須恵器の杯A・壺A蓋、土師器の杯Aが出土しており、平城Ⅱ期に相当する。

濠からは上層に須恵器の杯A・杯Bが含まれていたが、最下層から青磁碗が出土した。この青磁碗は形態からみて亀井分類のB-2タイプあるいは一乗谷出土のⅢ類の範疇で理解できる。したがって、年代も16世紀中葉と考える。

包含層出土の土器についても、内容から見て平城Ⅱ期に相当する。

第4トレンチ・他

第4トレンチ出土のものには飛鳥～奈良時代のものが混在している。Fトレンチ出土の2点は平城Ⅱ期に相当し、Dトレンチのものは飛鳥期にものと平城Ⅱ期のものが混在している。Eトレンチのものも平城Ⅱ期に相当すると思われる。

2. 墳輪

この調査における成果の一つとして、これまで知られていなかった埋没古墳1の発見が挙げられる。墳丘は削平をうけているが周溝から須恵器・埴輪が出土しており、猪名野古墳群の終焉期に築造されたと考えられる。猪名野古墳群は、古墳時代から前期から続く当地方の首長墓群として位置づけられているが、早い時期から市街化が進んだ影響を受け、詳細については不明な点が多いだけに、南本町1号墳の存在が明らかになった意義は大きい。出土遺物を中心検討を加え、当古墳のもつ性格の一端を明らかにしたい。

周溝からは古墳に伴うほかに奈良～中世にかけての遺物が混在し、かなり早い時期から改変を受けていたことがわかる。この影響からか、出土埴輪は点数が少なく、小片化するなど遺存状態は悪い。特に円筒埴輪においては、全体を観察できる資料がないため、断片的な検討にとどまったが、硬成な須恵質焼成である、器面調整に横ハケが見当たらず、縱もしくは斜め上方へのハケ調整が施されている、といった特徴が窺えた。一方タガは突出度こそ高いものの、端面の幅が狭く接着面が幅広い台形を呈するものが大半を占める。また、タガ端面に押圧を加えた、断続ナデ技法を認めるものも確認した。

形象埴輪では、蓋・盾・家のほか、動物が出土している。特に動物埴輪は、近隣の園田大塚山古墳（尼崎市）出土例と比較して、緻の表現などに後出する要素を看取できる。脚部のみが出土した動物形埴輪については、特徴の違いから馬・人物・小動物などを推定でき、本来は豊富な器種が樹立されていたことがわかる。小規模な墳丘に比較して、円筒埴輪や豊富な形象埴輪を有する点は、当古墳群における埋没古墳1の立場を暗示ものとして、注目したい。

以上の特徴から、埋没古墳1で出土した埴輪は6世紀前葉の所産と考えられる。共伴する須恵器の年代感とも矛盾せず、当古墳の築造時期を示すものと位置づけたい。猪名野古墳群における6世紀代の古墳として、前方後円墳の園田大塚山古墳がある。直線距離にして350mに位置し、出土遺物の特徴からほぼ同時期に築造されたと考えられるなど、両者には深い関連が窺われる。

5世紀末から6世紀にかけては、大型の前方後円墳から小規模な古墳の群集へと“古墳”的持つイメージが変化を見せる。その変質期において近年、多数の方墳で構成される古墳群が知られるようになった。傑出した首長墓とは明らかに性格を異にするこれらの古墳群は、後期古墳に顕著な“古墳を造営できる階層の拡大”傾向の初現形態として注目を集めている。

南本町遺跡では、埋没古墳1から離れた第1・2トレンチからも埴輪・須恵器が出土しているほか、C・Gトレンチで古墳の周溝と思われる溝を検出しており、周辺で行われた他の調査においても古墳の存在が確認されている。南本町遺跡周辺に小規模古墳が多数埋没している事実は、猪名野古墳群の終焉期における状況に新しい視座を提示するものである。

古墳時代後期～終末期における阪神間の古墳については、2つの類型が指摘されている。つまり前期から累々と築かれてきた、前方後円墳によって形成される在地色の強い古墳群と、古墳時代後期に入って突然的に出現する古墳群である。住吉宮町古墳群（神戸市）などの小規模方墳群は、後者の側面が指摘されてきた。前者の色彩を有する猪名野古墳群において、園田大塚山古墳を中心とする小規模古墳群が形成されていた可能性は、“古墳”的変質と対応する様相であり、旧態の首長墓～前方後円墳～主体の古墳群の終焉と新しい古墳形態の発生を考える手がかりと考えられる。

第2節 遺構

ここでは南本町遺跡で検出された様々な遺構について、一部重複する記述もあるが、各時期ごとに総括したい。

古墳時代

古墳時代の遺構はこれまで南本町遺跡では知られていなかった。今回の調査区では埋没古墳1基と、古墳時代の溝2条を検出した。特に埋没古墳1はその全景を知りうるという点で重要な成果である。

古墳は内径15~16mの小規模な円墳で、埴輪が周溝の中から出土した。埴輪および須恵器の年代からこの古墳は6世紀前葉のものと考えられる。周溝の基底部には凹凸があるが、旧地形に沿っているのか、南側に向かって低くなる。また、検出状況では周溝は全周しておらず、東側には陸橋状の高まりが認められた。周溝がとがれる部分は約1.5mと狭く、周溝の基底部を検出したことを考えれば積極的な根拠を欠く。この部分が陸橋となる可能性を指摘するにとどめておきたい。

周溝からは古墳時代の須恵器、埴輪と共に、奈良時代の須恵器も出土したが、いずれも細片で接合が困難である。これらの遺物は、転落した状況ではなく、人為的に攢押された出土状況を示している。周溝内の遺物は上層で確認された数点の中世陶器を除けば、奈良時代の須恵器・土師器がもっとも新しく、この時期まで溝が機能していた可能性が高い。この須恵器の年代は周辺で検出された奈良時代の遺構のそれとはほぼ同時期である。のことから、この埋没古墳は、奈良時代の掘立柱建物群を建設する際に周溝部分を埋められたものと考えるのが妥当であろう。

ただし、溝内の遺物出土状況からは、マウンドを完全に削平されたというものではなかったとみられる。戦国時代の濠が古墳時代の周溝に沿って巡るという事実は、おそらくマウンドの高まりを利用して砦を築いたからであろう。つまり、戦国時代にはまだマウンドが残されていたものと考えられる。ただし、濠からは奈良時代の土器はあるが、古墳時代の遺物は得られていない。

古墳時代の遺構は調査区南東に集中していた。CトレンチとGトレンチでは緩やかに弧を描く溝を1条ずつ検出した。溝はいずれも幅1mのトレンチにごく一部がかかったにすぎず、その詳細をることはできない。Cトレンチの溝12は幅4m、Gトレンチの溝13は幅4.5mの規模で、埋没古墳1よりもやや幅は広い。埋土の色調、特徴に加えて埴輪等の出土状況も埋没古墳1の状況と同様であることが指摘できる。確かに、現状ではこれらを古墳であるとする積極的な根拠を欠く。しかし、猪名寺廬寺下層でも埴輪を持つ古墳の存在が推定され、西隣接地の調査でも古墳の周溝と考えられる遺構が検出されている。これらの点を考え合わせれば、今回の調査地点を中心に小規模古墳からなる群集墳の存在が予想される。なお、伊丹市教育委員会との協議の結果、今回新たに発見された埋没古墳1および溝12・13を南本町1~3号墳と命名した。

飛鳥~奈良時代

この時期の遺構は、今回の調査区のほぼ全域で検出することができた。遺物から考えて、複数の時期の遺構が混在している。掘立柱建物は第2トレンチ、第3トレンチ拡張区、Dトレンチ、Eトレンチで合計5棟を検出した。調査区の制約があって復元できなかったものも数多く存在するはずであり、今回の調査区のほぼ全域に掘立柱建物群が広がることが推測される。

5棟の掘立柱建物のうち、掘立柱建物3～5は遺物から見て奈良時代のものである。いずれも棟軸の設定は磁北を基準としておこなわれており、3棟が同時期に併存した可能性もある。また、掘立柱建物1・2に関しても、軸線をほぼ同じくしているため、同時期である可能性を持つ。そして、これらの掘立柱建物と同じ軸線をとる溝の存在も確認できた。このことから溝ないしは扉をともなう掘立柱建物群がこの調査区全域に広がる可能性が指摘できる。

調査面積の制約から、建物として復元できなかった柱穴も數多くある。これらの柱穴や溝は、調査区の中でいくつかの群として偏在していることが指摘できる。つまり、第1、第2、Fトレンチでは、溝1を境に遺構が稀薄である。第3トレンチ北とF南トレンチには遺構が集中するが、やはり溝7を境に以東の遺構は稀薄となる。今後の周辺調査では遺構の粗密を的確におさえる必要があるだろう。

また、これらと異なる軸線をもつ奈良時代の遺構も存在する。第1トレンチの溝5は磁北からやや西にふった方向に主軸をもつ。このL字に曲がる区画溝の内側については、建物の存在を明らかにできなかった。しかし、第1トレンチの北側にも跡跡は広がることが予想される。また、今回の調査範囲の西隣接地で平城II～Ⅲ期の大型掘立柱建物も検出されており、東側には猪名寺廃寺も存在することから、それらとの関連も今後の検討課題である。

戦国時代

戦国時代の遺構は濠のみである。この濠は古墳のマウンド部分を囲う形で開削されていることから、古墳のマウンドを利用した砦のような性格の遺構の可能性が考えられる。

この濠の区画内では戦国時代の遺物、遺構はとともに全く検出されなかった。また、砦の築造には古墳のマウンドを利用したと推測されるが、濠内からは古墳時代の遺物は全く出土しなかった。これらのことから濠の区画内には高い盛土がなされていたものと考えられる。

築造時期については、出土した青磁碗片からみて、16世紀中葉と思われる。また、形態的に見ても、「折れ」の技法は織豊期の特徴的な築城技術であることが指摘できる。この「折れ」によって造られる張り出し部は、有岡城と対峙している。この状況から判断して、天正6年から同7年（1578～79年）にかけて行われた織田信長による有岡城攻めに関連する遺構の可能性も考えられるだろう。

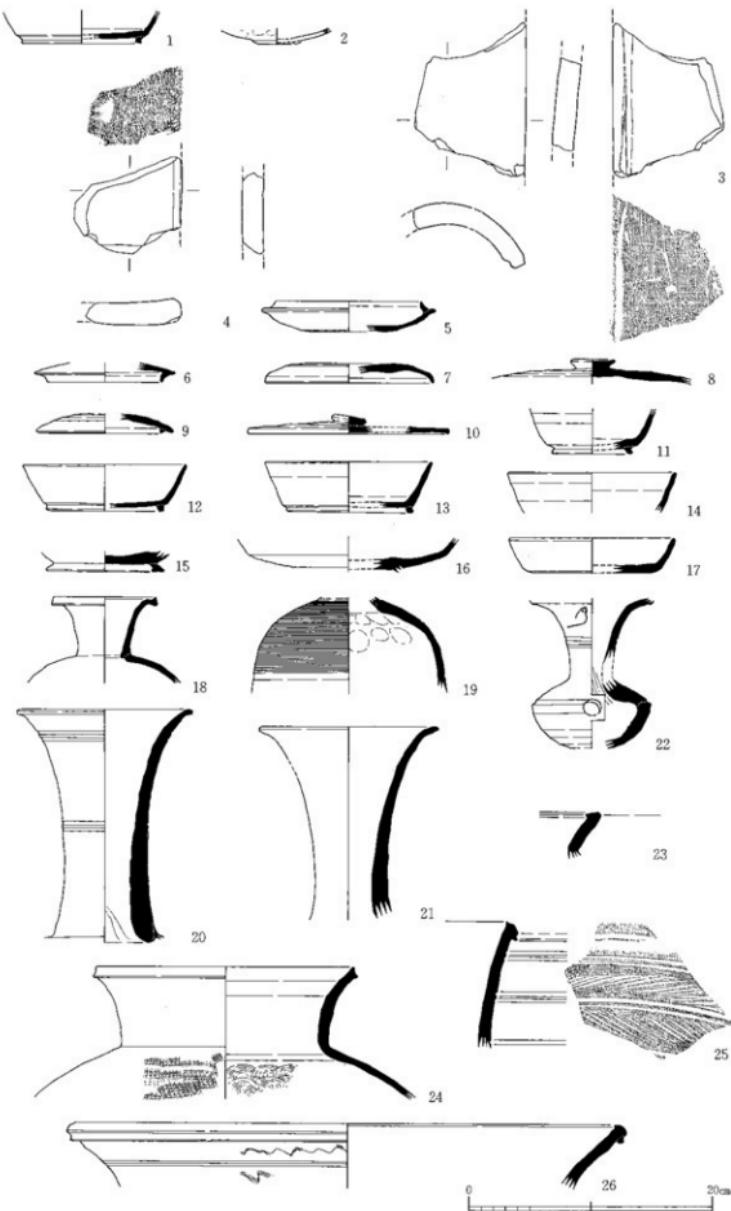
引用・参考文献

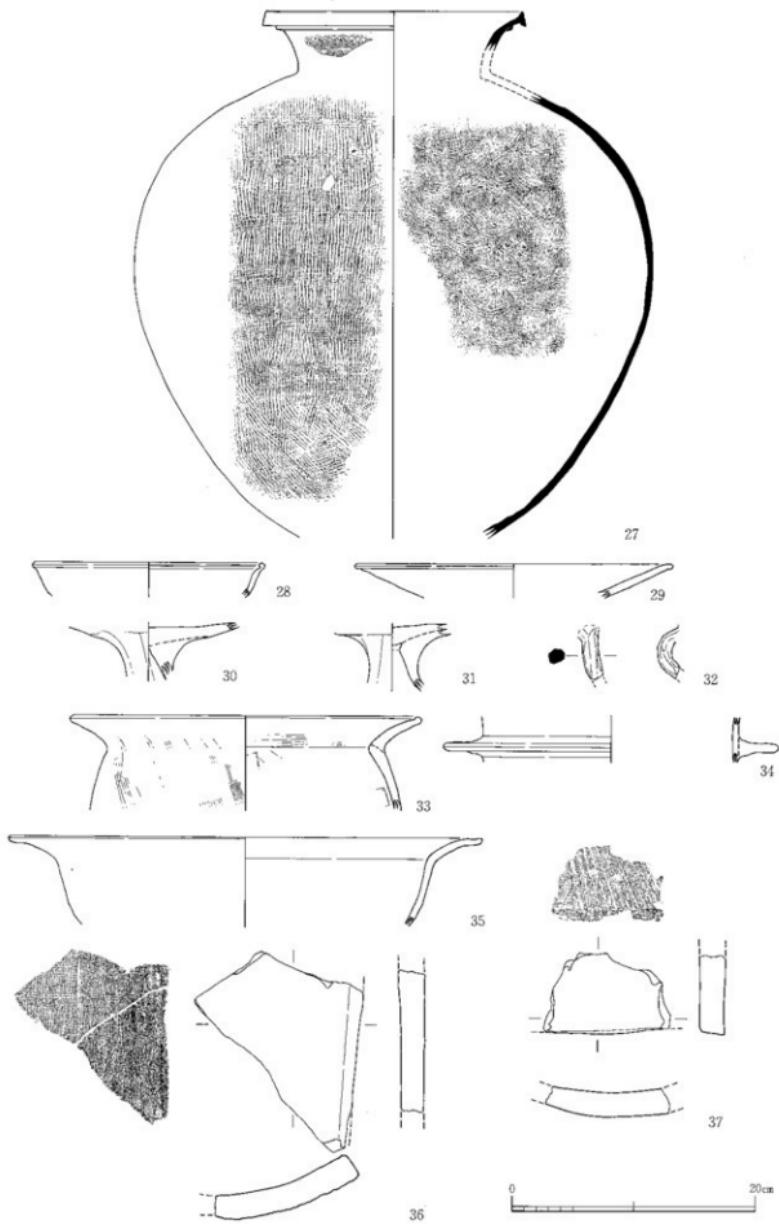
- 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』(1980)
- 村川行宏『尼崎市史第11巻 別編Ⅱ』(1980)
- 尼崎市教育委員会 『田能遺跡発掘調査報告書』(1982)
- 尼崎市教育委員会 『尼崎市猪名寺廬寺跡』(1984)
- 尼崎市教育委員会 『尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ』(1991)
- 尼崎市教育委員会 『尼崎市埋蔵文化財遺跡分布地図及び手引き』(1996)
- 伊丹市教育委員会・財団法人古代學協会 『伊丹市口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書－』(1988)
- 伊丹市教育委員会 『埋蔵文化財保護の手引き』(1989)
- 古代の土器研究会 『古代の土器1 都城の土器集成』(1992)
- 古代の土器研究会 『第5回シンポジウム 7世紀の土器』(1997)
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』(1995)
- 豊中市教育委員会 『豊中市埋蔵文化財年報2』(1994)
- 奈良国立文化財研究所 『平城京朱雀大路発掘調査報告』(1974)
- 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』(1974)
- 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(1976)
- 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告Ⅷ』(1978)
- 奈良国立文化財研究所 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』(1980)
- 奈良国立文化財研究所 『平城京 長屋王邸宅と木簡』(1991)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『平成7年度 年報』(1996)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『平成8年度 年報』(1998)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『伊丹郷町』(1993)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『田能高田遺跡』(1997)
- 福井県教育委員会 『特別史跡一乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』(1979)

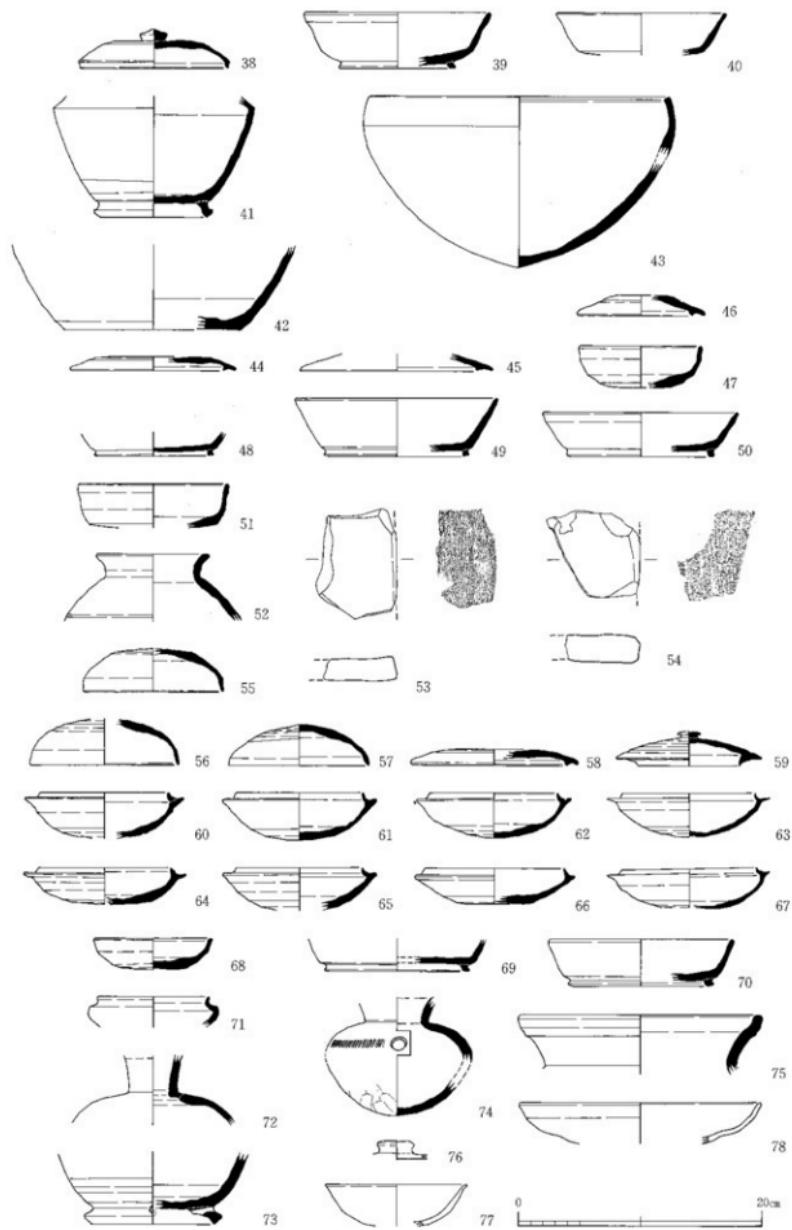
報告書抄録

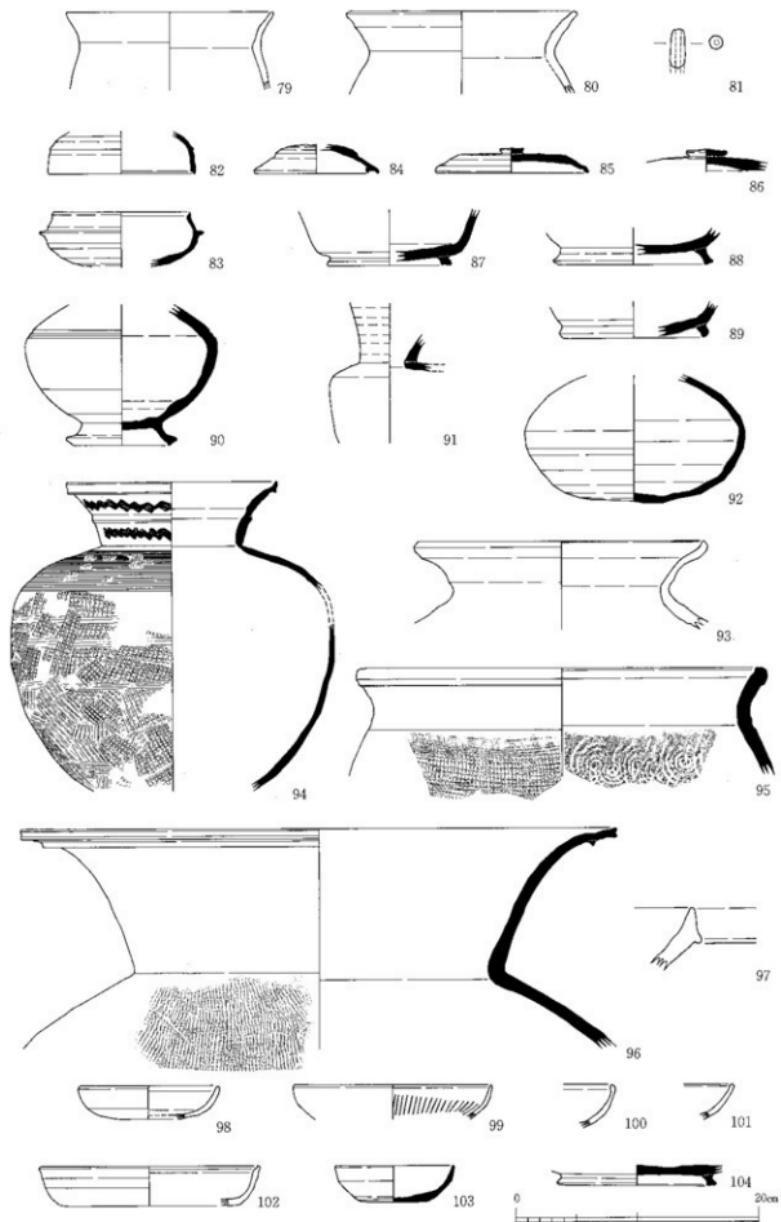
ふりがな	みなみほんもいせき							
書名	南本町遺跡							
副書名	災害復興県営伊丹南町住宅建設事業に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第179号							
編著者名	鐵 英記・種田淳介・藤井 整・柏原正民・平田博幸							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号						直 078-531-7011	
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月13日							
所取 遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町 村					
南本町	兵庫県伊丹市 南町3丁目 28-1	28207	950246	34度 45分 52秒	135度 25分 24秒	第1次調査 1995.10.18 1995.10.19 第2次調査 1995.12.13 1996.03.22 第3次調査 1996.06.05 1996.06.21 第4次調査 1997.04.25 1997.05.23	56m ² 1,300m ² 640m ² 235m ²	災害復興県 営伊丹南町 住宅建築に 伴う事前調 査
		950341	960108					
			970133					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南本町	集落跡	弥生時代		石器				
		飛鳥時代 奈良時代	壇立柱建物5棟、 溝12条、土坑2等	須恵器、土師器、土錐、 砾石				
		中世末	漆(碧跡)	青磁碗、撻り鉢		有岡城攻め関連		
	古墳	古墳時代後期	古墳1基、周溝2 (南本町1-3号墳)	須恵器、円筒埴輪、 形象埴輪		新規発見		

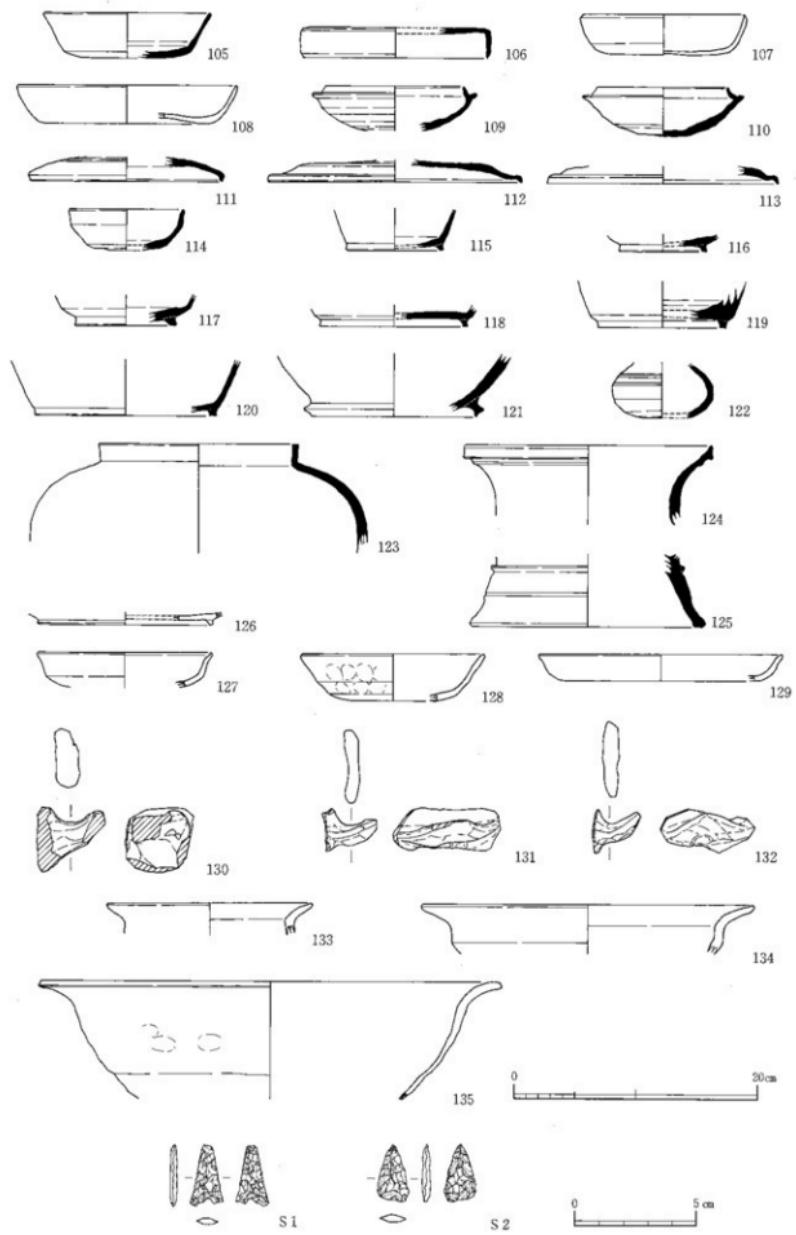
図 版

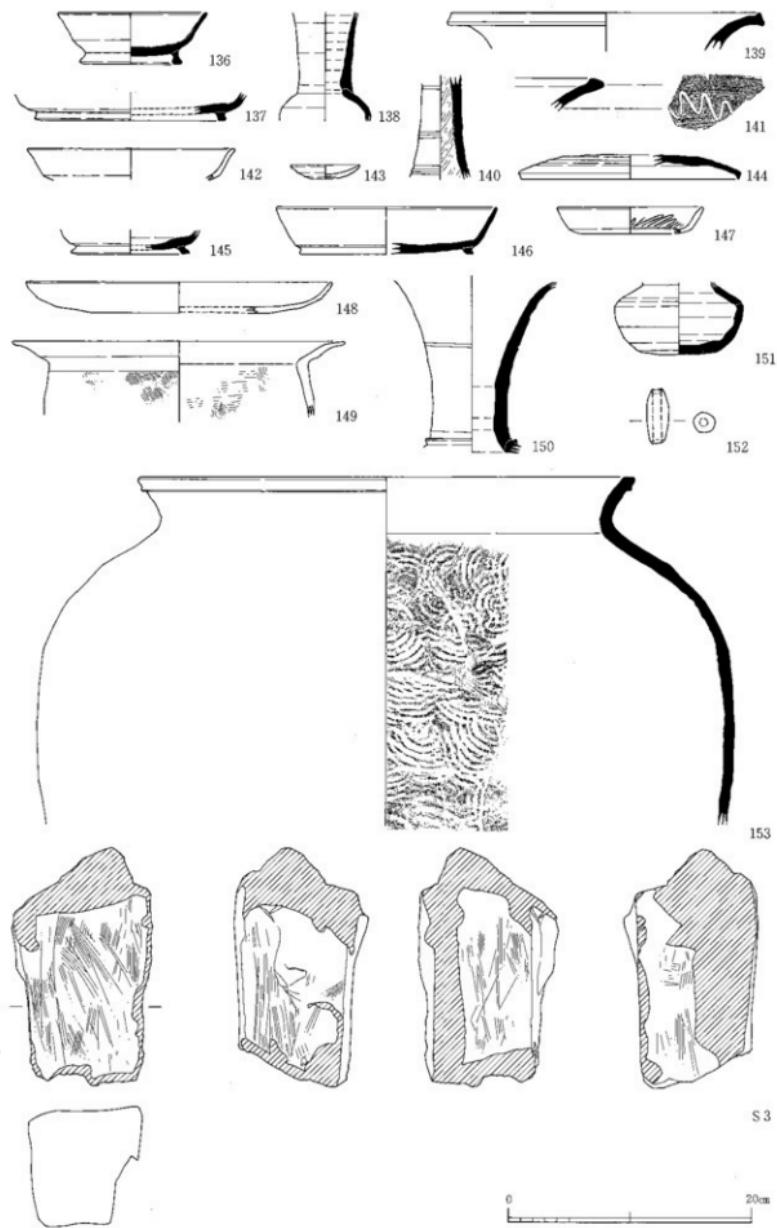


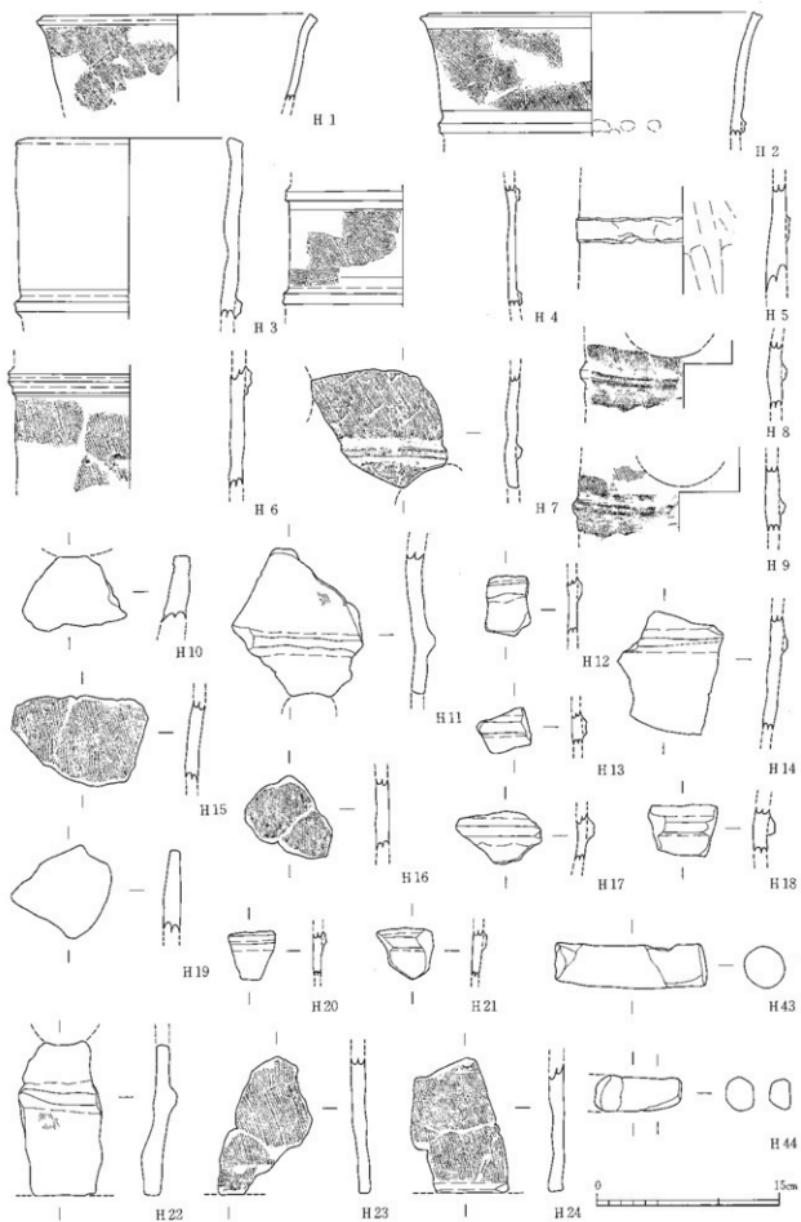


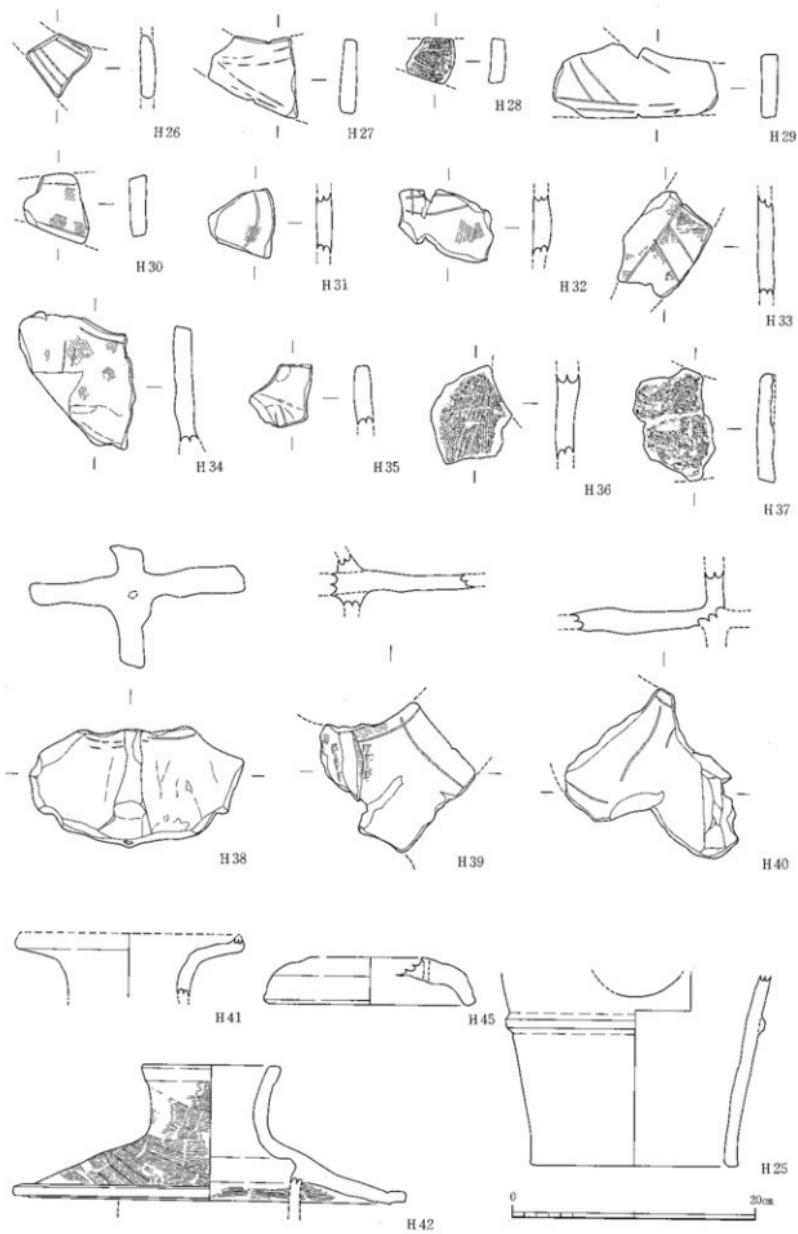


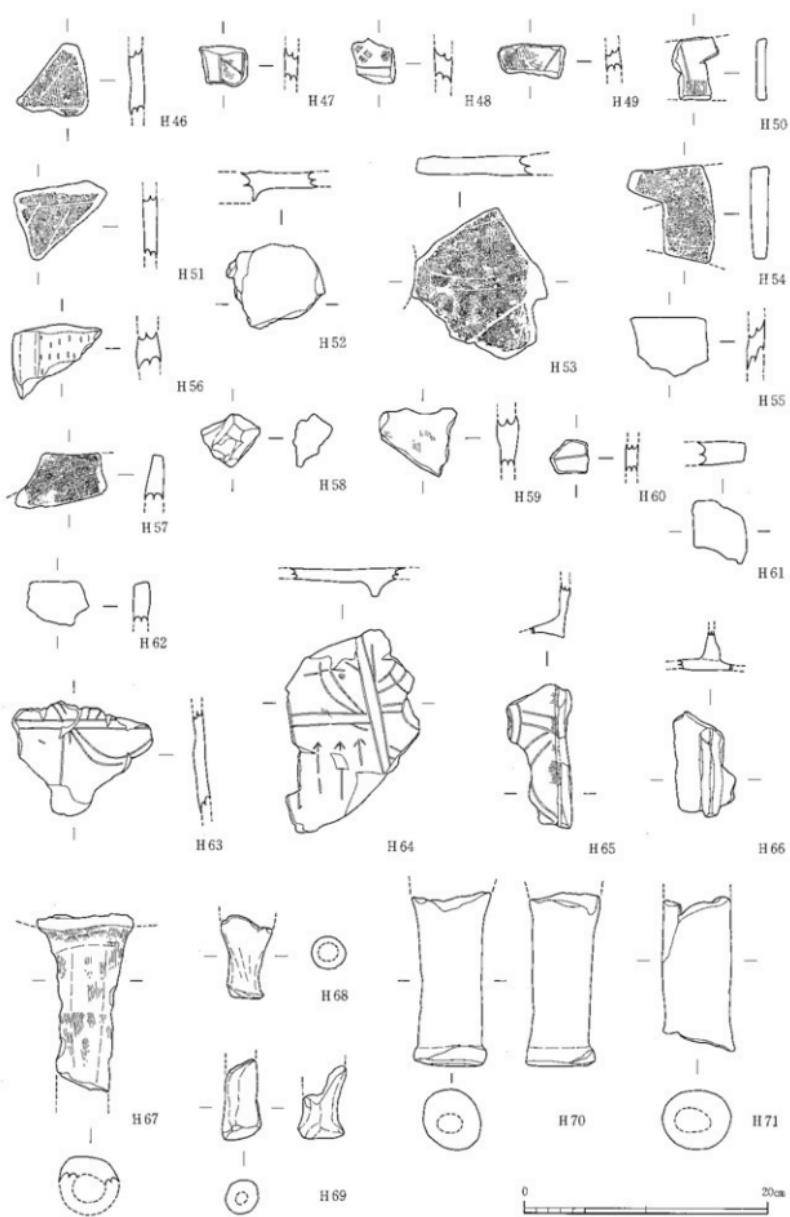










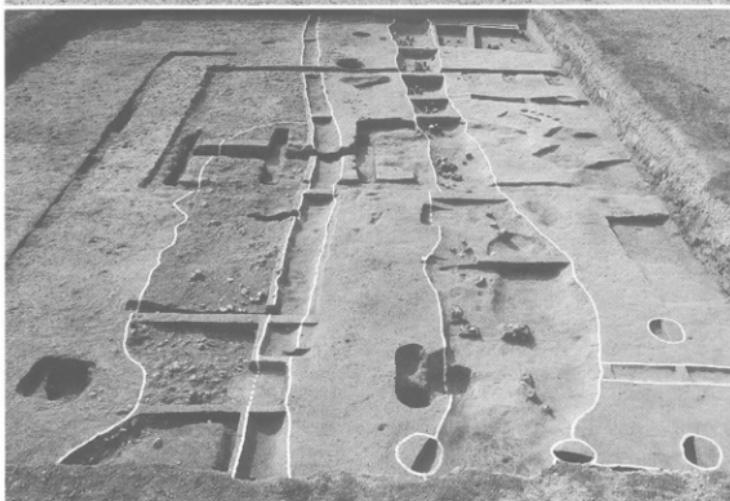


写真図版

調査風景



第1 トレンチ全景（東から）



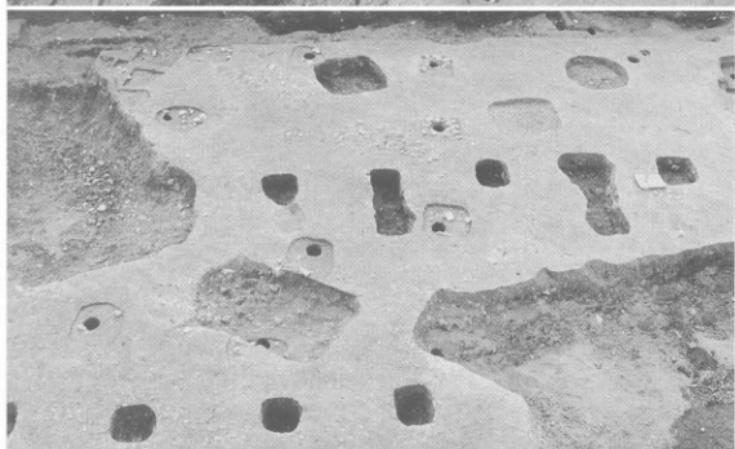
第5 遺物出土状況（南から）



第2 トレンチ全景（東から）



掘立柱建物 1（北から）



第3 トレンチ土坑 2（北から）



第3 トレンチ拡張区全景
(南東から)



第3 トレンチ拡張区全景
(北から)



塹土着断面（南から）



写真図版4

95年度の調査(3)

第3 トレンチ全景（東から）



埋没古墳1検出状況（南から）



第4 トレンチ全景（西から）





F 南トレンチ全景（南から）



堀立柱建物4



D トレンチ（北から）



G トレンチ全景（北から）

C 中トレンチ全景 (北から)



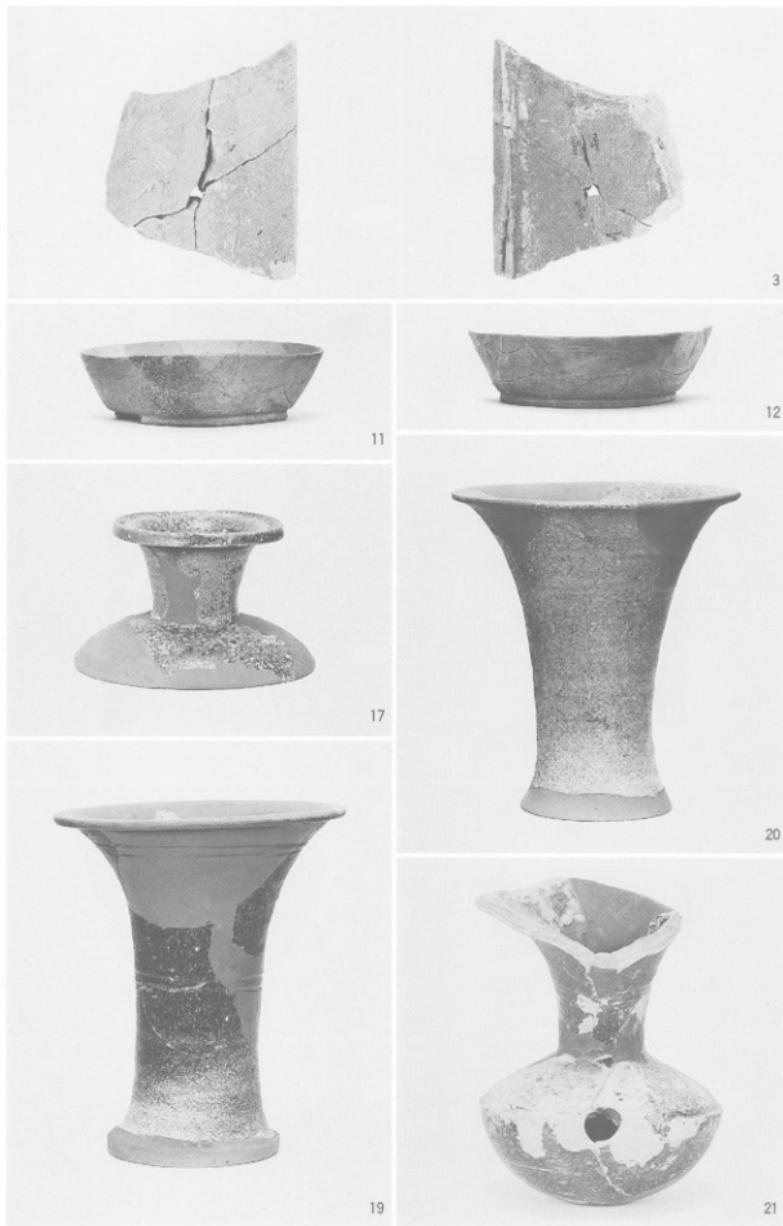
堀立柱建物 5 砥石出土状況
(東から)

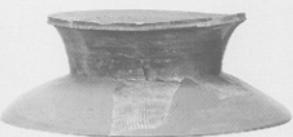


D 南トレンチ (北から)



出土遺物(1)

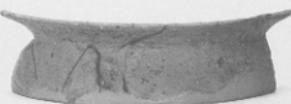




23



24



32



37



35



38



40



42



49

出土遺物(3)



50



51



54



55



58



61



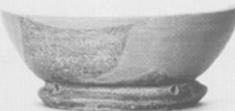
63



66



67



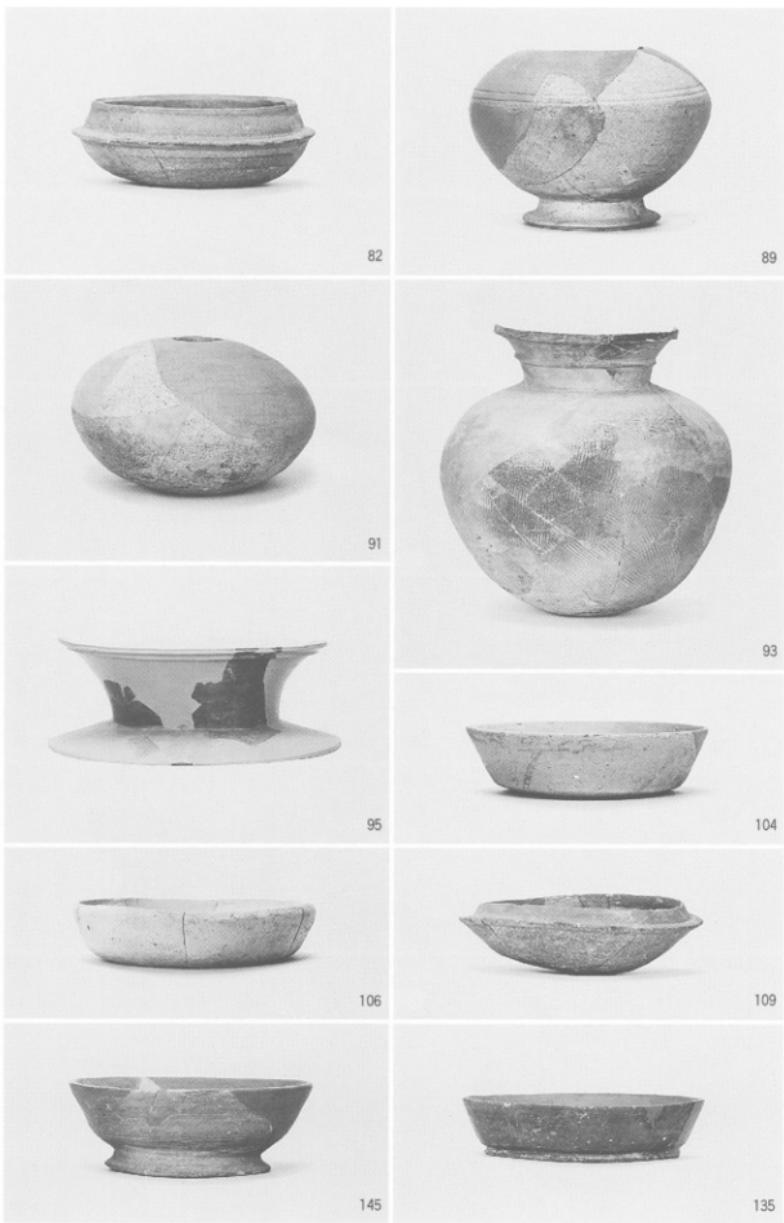
72



73



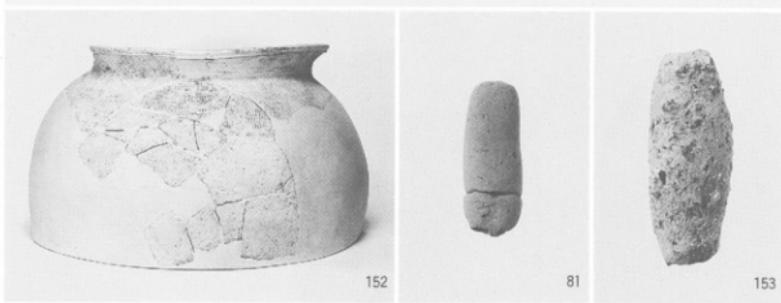
76



出土遺物(5)



154



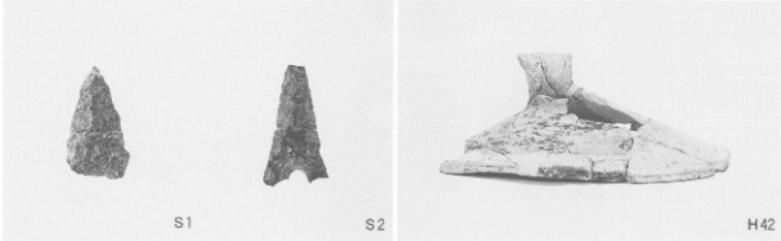
152

81

153



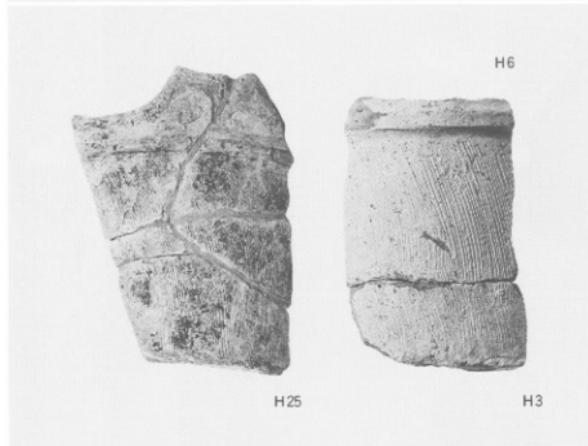
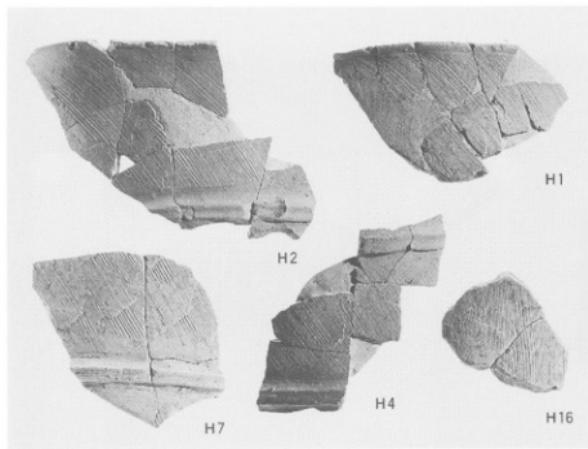
S3

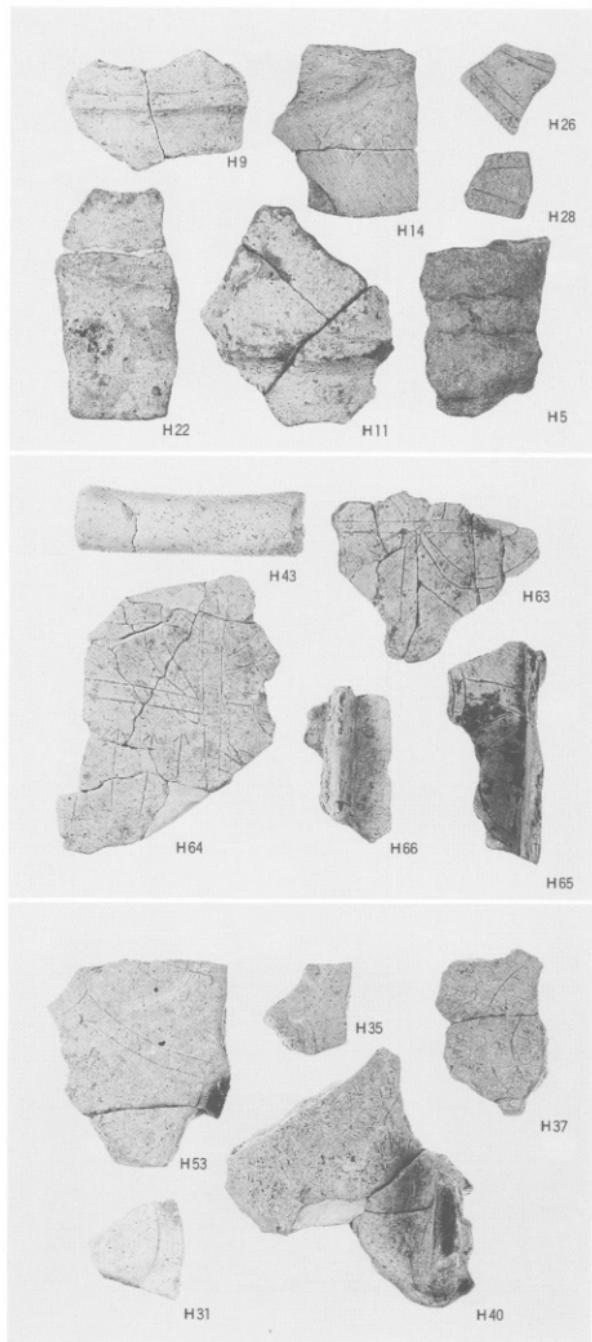


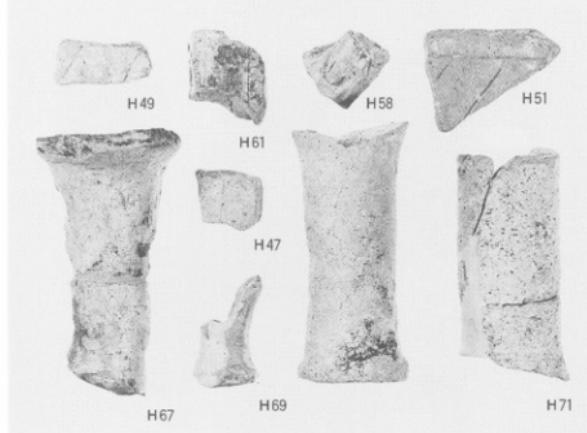
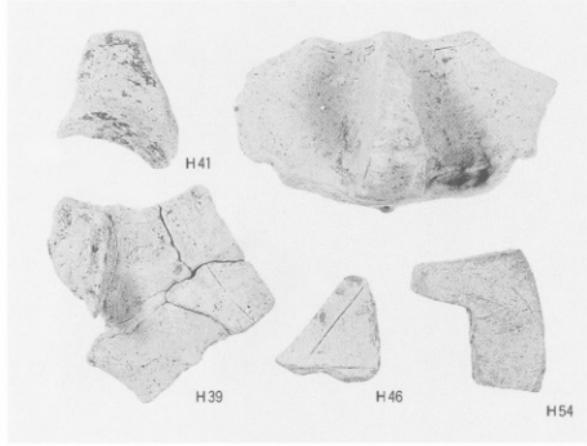
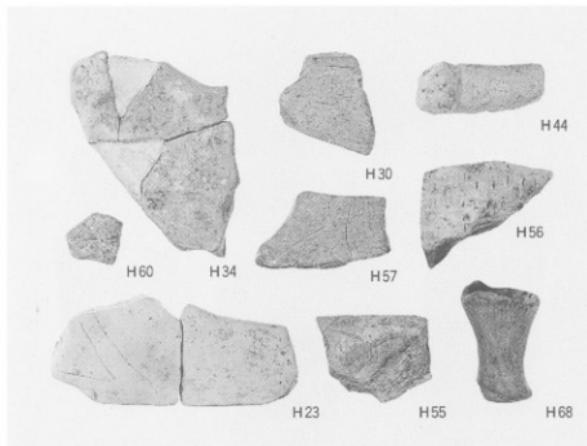
S1

S2

H42







兵庫県文化調査報告 第179冊

南本町遺跡

—災害復興県営伊丹南町住宅建築事業に伴う発掘調査報告書—

平成10年3月13日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
